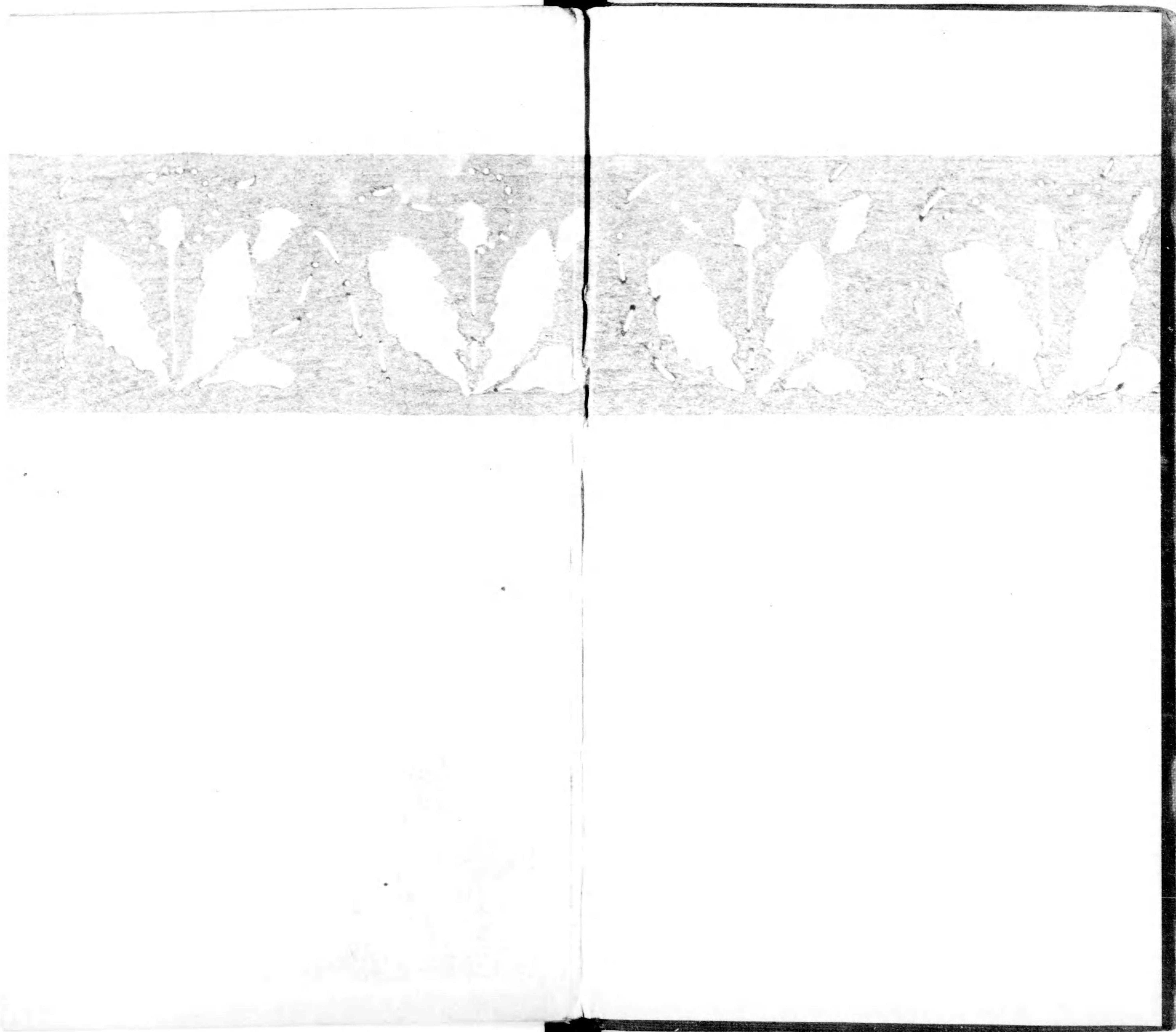


始





持101
908



■
世
の
中

大正
4. 2. 20
内交



■本書の表題は著者の直筆なり

名著梗概及評論刊行趣旨

世間には賣行きの善き書物あり。賣行きは悪しけれども價値の多き書物もあり。廣く讀まるゝ書物、並に廣く讀まれねばならぬ書物を撰びて先づ其梗概を説き更に其内容を評論し、其長所と短所とを明かにし、讀者界の火柱たらんとするは本書刊行の目的なり。而して其評論の爲に筆を執る人々は孰れも當代知名の文士にして識見、學殖少くとも著者と相等しきものならざるはなし。評論とは價値を定むることなり。本書一たび出で、思想界始めて群書の價値を解し、或か帝國興國の氣運に貢獻するを得ん歟。本書の向つて進まんとする思想に此の如し。

大正三年十二月

編者識

友人敬文館主人樫村氏近頃世間に名高き書物の批評を公にする企あり。我等には三宅雪嶺博士の『世の中』と、徳富蘇峰先生の『時務一家言』を書くべきことを依頼したり。早速承知の由は答へ置きたれども昨今或る著述に應ずことありて讀書にのみ耽り筆取る隙も少なければ、今日の明日のと言延ばし、僅に先づ『世の中』に就て一文を草するを得たり。此著則ち是なり。我等の思ふ所を遠慮なく言はゞ『世の中』は雪嶺博士の堂奥を窺ひ得べき書に非ず。僅に是れ夫子の小學に過ぎざるのみ。されど我等は猶ほ多大の興味を以て之を讀み了ることを得たり。何となれば博士の大なる常識は此『世の中』に充滿し、人をして且頷き且誦せしむるものあればなり。我等の信ずる所に依れば批評の任務は我を以て人を律するに非ず、唯だ人

の眞の位置を正しく理會するに在り。我等の文、博士に對して寸毫も毀譽褒貶を加ふる所なく、唯だ忠實に博士の論據を窺めんと力めたるは是が爲なり。されど盧山の面目は縦看するものと横看するものと各其見る所を異にす。我等は雪嶺博士に非ず。何ぞ其全形を盡すを得ん。唯だ我等の心に映じたる『世の中』を餘す所なく、蔽ふ所なく畫きたるに過ぎず。

大正四年二月上浣

愛山逸氏識す

世の中 目次

- (一) 現代語の雪嶺文集……………一
- (二) 俗人たる雪嶺……………八
- (三) 現状維持の平凡なる教理……………一八
- (四) 小さい樂天主義……………二二
- (五) 到底一種の成功論(上)……………二七
- (六) 到底一種の成功論(下)……………三二
- (七) 古典時代の人生觀……………三八
- (八) 活動主義……………四八
- (九) 全體の統一、部分の獨立……………五五

世の中

山路愛山著

(一) 現代語の雪嶺文集

此書は雪嶺博士の著述ちよじゆつめいの銘めいを打つて出たけれども雪嶺自身に筆を取つたものではない。雪嶺の座談ざだんを無名の文士が筆記したものである。其證據そのしやうこは書中に澤山たくさん現はれて居る。今其掩おほふべからざるものを擧げよう。第一此書は漢學かんがくの素養そやうの少しも無い人が書いたものに相違さうゐない。例へば『是れ』と書くべき所に『之れ』と書いたのが多い。斯かう云ふ亂暴らんぼうな漢字かんじの使用法しやうほうは雪嶺

目次終

- (一〇) 部分の悲觀、全體の樂觀……………六二
- (一一) 現代を謳歌する人……………六九
- (一二) 三宅雪嶺とは如何なる人ぞ(上)……………七五
- (一三) 全……………(下)……………八三
- (一四) 雪嶺の時世觀(一)……………八六
- (一五) 雪嶺の時世觀(二)……………一一九
- (一六) 人物論……………一三五

が自身筆を採つたならば決して起るべき過でない。雪嶺ほどの年齢に達した人は其時代の教育が斯う云ふ過を、意識的にも無意識にも爲すべき筈が無い。其外『有るか無きかに見られて居る』と書くべきを『在るか無きかに見られて居る』と書いたのもある。標題に『良教訓としての失敗』と云ふのがある。是は『教訓としての失敗』と書くべきものであつて、良の一字は全く贅である。福澤諭吉を元勳と云つた所もある。是も博士自身ならば何とか外に妥當の文字を發見すべき筈だ。斯う云ふ例を挙げれば殆ど滿紙皆是なりと云つて善い。しかし他人の聞取に成つた書物の缺典は獨り文章の粗末なこと計りに現はれて居ない。中には往々雪嶺の言つた意味と間違へたのもあり、或は雪嶺の意を盡くさないものもあるやうだ。たとへば二

八五頁に斯う云ふことが書いてある。

『若し淺野内匠頭にして怒りを抑へ、苦心慘憺して功を樹て藩を大きくするか、或は老中となつて吉良を支配するの位置になつたらば吉良は曩の無禮を悔いずには居られぬ』

と斯んな事が雪嶺の口から出る譯は無。淺野の本家は勿論外様の大名であるが別家の内匠頭は祖先の采女正以來故あつて譜代になつた。しかし老中になるやうな家では無い。こんなことは博士が知らぬ筈は無いから、勿論博士の口から出やうは無。幕府の制度慣習などはちつとも知らない無學の筆者の附け加へである。二一六頁に

『頼山陽は徳川氏極盛の時と書いた』云々

とある。ちよつと外史に目を通したものでならばこんな書き方をすべきで無い。二八五頁に

『頼山陽は中江兄弟に辱かしめられて、今に見ると大に勉強し遂に山陽たるに至つた』

と云ふのも山陽の傳を知つて居るものならば、今少し筆に加減をしなけれはならない書き方である。二八〇頁に

『渡邊華山は不忠不孝と書し、而して忠孝の模範と認められた』

とあり、二八七頁に

『大鹽平八郎が大阪で焼け死んだ』

とある如きも餘り書き方が粗雑であつて意を盡くして居ないから當時の

事情を知らないものには全く意味が分らない。二〇三頁に十二番目の仙人が王子を祝して不平なれと云つたと書いてあるが此不平と云ふ字は不満足と改むべきである。不平と不満足とは違ふ。三四九頁にナポレオンの事を書いてナポレオンは天下の大權を握る爲に朋友を顧みなかつたと云つてある。ナポレオンは戀や友誼に重きを置いたものでは無い、戀と友誼に對しては極端な懷疑家であつた。さりながら彼が戀と友誼とを信じないが爲に彼は朋友を持たず、朋友を輕蔑したのでは無い。たとへば妻子王位も臨終の時には何の役にも立たないと覺つたからと云つて平時に妻子と隔離し、王位を厭ふと云ふ譯では無い。ナポレオンの友誼に對する告白は彼が獨り力の信者たる覺悟であつて、それが爲に彼は朋友を顧みなかつたのでは

無い。彼は塵ちりより大將を作つたと云はれた如く朋友に依つて天下を取つたのである。彼が人才じんさいに對する熱情ねつじやうは其傳記そのでんきに現はれて知る。彼は有情いうじやうの人であつた。しかしながら彼は力の信者であつた。斯う云ふ事實じじつを雪嶺の知らぬ筈は無い。しかし三四九頁の文に依ればナポレオンは全然ぜんぜん無情漢むじやうかんになつてしまふ。筆者が雪嶺の講釋かうしやくを聞いて其意を盡くさなかつた過あやまちである。其外此書には隨分ずぶん品の悪い詞ことばが平氣へいぎで書いてある。たとへば『田吾作』『穀潰つぶし』『製糞器せいふんき』などはそれである。我々はそう云ふ品の悪い詞ことばも暖爐だんろを圍かこひ會話くわいとしては或は紳士しんしの口からも出やうと思ふ。さりながら雪嶺が自ら筆を取つたらば斯う云ふ卑猥ひわいな俗語ぞくごは必ず削り去られたことであらうと思ふ。斯う云ふ理由りゆうから我々は此書は雪嶺自身の筆に成つたものでは無く、

雪嶺の話聞き取つた無名の文士の筆記ひっきであると斷ずる。しかし同時に我々は斯う云ふ缺典けつてんがあるに關かはらず。此書の筆者の勞らうを多とする。雪嶺の談話だんわは中々聞き取り悪い。その聞き取り悪い話を兎も角かくも讀み易やすく、分り易やすく書き取つた文士の筆には尋常じんじやうならぬ力があると云つて善よい。前に指摘した漢字の使用の間違まちがひなどは實はどうでも善い問題である。意味が分れば我々はそれで満足まんぞくしなればならない。多少は雪嶺の意を誤解ごかいし、若くは曲解きよくかいしたことがあつても、それは小部分せうぶの過で大體に於ては誠まことに善く書いてある。雪嶺の會話は善い通譯者つうやくしやを得た。此位なら満足まんぞくしなればならない。雪嶺が若し自身で書いたらば今の讀書界とくしよかいには却て分り悪くかつたかも知れない。此書は此點このてんに於て現代語げんだいごの雪嶺文集せつれいぶんしふと云ふべきものである。

(二) 俗人たる雪嶺

雪嶺博士は思想家だと聞いて居る。私は不幸にして雪嶺の名を以て出た『王陽明』と云ふ書物を二十年前に讀んだだけであつて其外は見たことが無い。雪嶺には『宇宙』と云ふ哲學上の著述があると云ふ。彼は哲學者に相違あるまい。しかし此書にはそうした哲學らしい趣味は毛頭ない。此書に現はれた雪嶺は思想家でも、哲學者でもなく、そう云ふ問題には少しも觸れて居ない。現代は生の問題の思索に勞れ、さまざまの哲學に悩んで居る。しかし此書の雪嶺はそう云ふ問題には毛頭も立入らない。現在の社會組織の評論すらも雪嶺は純理論としては一指をだに彈かない。此書の雪嶺は唯

だ浮世の常識を説いた計である。一言にして言へば雪嶺は唯だ渡世の術を説いたに過ぎない。『世界』を著はした哲學者の雪嶺は『世の中』を著はして處世術の小乗を説く教師になつた。是は決して雪嶺の過ては無い。雪嶺が故意にそうしたたのでも無い。實は此書の性質が然らしめたのだ。此書は雪嶺自身の著はしたもので無い。そうして此書の問題も博士自身が選んだものでは無い。此書は他人が題を雪嶺に課して其口頭の答案を筆記したものだ。『實業之世界』記者が『先生此問題は如何思召す』と雪嶺に迫つて其重い口を開かせたものに過ぎないから、問題の大小に従て、其答も大小があり、問題の區域に依つて思想も渡世の術に限られたのは已むを得ないことである。さりながら讀書の社會は是に依りて意外の利益を得た。今までは六つ

かしいことを云ふ哲學者の雪嶺、論客の雪嶺にのみ接した我々は直ちに堂に上り室に入つて俗人たる雪嶺に接するを得た。そうして我々は雪嶺は獨り書物の虫でない、書齋の人でない、迂遠な哲學者でない、却て世間を善く知つて居る俗物（善き意味に於ての）たることを學ぶを得たのは實に意外の獲物であつた。雪嶺は世間の知つて居ることは何でも知つて居る。彼は社交界の人の如くであつて書齋の人の如くでは無い。彼曰く

『維新後には今紫の歌、盛糸の舞等が全國に謳はれた。次でかよに千代と云ふのが持て囃された。後にポインタが出て此頃萬龍などが出て居る。』

圖らざりき嚴格なる雪嶺先生の口より斯んな粹な話を聽かんとは。彼はバリの女優の盛りは平均五年間だと云ふこふとを知つて居る。彼はスト

ライキ節が行はれて後ラツバ節が行はれ、ラツバ節が行はれた後にまがい節が出たことを知つて居る、彼は常陸と梅の人氣が落ちて太刀山が全盛になつたことを知つて居る。彼は學者のやうな六つかしい顔をし居るが思の外粹人である。それ者である。彼の頭腦は割合に細かく働く。彼の譬諭は巧妙である。彼は大人物と小人物を譬へて斯う言つた。

『曾て靖國神社の前に競馬場があつたことがある。洵に狭い競馬場である。當時最も駿馬の聞へのあつたのが西郷從道侯所有のダブリンであつた。

そのダブリンは時としてはくだらぬ馬に負けたりすると云ふのは狭い競馬場で駈けるに力が餘り過ぎる。まだ力を伸ばすに至らずして早くも到着點に達する。短かい距離で勝を制するのはもつと力の劣つた馬の方で

ある。距離が遠くなるほど名馬の力の現はるゝのであつて、ダブリンは横濱の競馬場に出れば殆ど敵のない有様であつた。』

誠に卑近でそうして大人物と小人物の差違を明白にした譬諭である。雪嶺は又人間の運命を電車の來るのを待つて居る人が或は前の車が發した直ぐ後に立つて後の車の來るのを長く待たねばならぬのと或は丁度電車の來た時に通り合はせたものとの比較して居る。斯う云ふ譬諭ならば誰にでも分る。雪嶺は唯だ六づかしいことを云ふ學究では無い。雪嶺の談話は學者の講義では無い。世故に通じ、人情を解し、常識に豊かな人の物語である。雪嶺に問題を課した此書の著者が斯うして雪嶺から俗人（善い意味に於ての）の部分を抽出し得たのは獨り筆者として祝すべきのみでは無い、日本

の公衆は雪嶺のやうな學者から平凡な眞理を聞き得たことを感謝すべきである。筆者と共に打ち寛いだ雪嶺の奥底ない談話を聞き、哲學者、政論家の半面に潜んだ常識に達したのは我々が文壇の爲に感謝する所である。殊に我々の愉快に感ずる所は雪嶺が斯う云ふ場合にも多く自己を語らないことである。雪嶺は矜莊の態度を以て自己の威嚴を示す畏るべき學者では無い。雪嶺は問に應じて遠慮なく語る。雪嶺は叩いたものに應じて語る。しかし如何なる場合に於ても問題の埒の外に出て、三宅雪嶺其人を語らない。六百頁に近い大冊子の中に我々は三宅雪嶺其人の自叙傳を唯の一行も發見することは出来なかつた。是は我々に取つて誠にゆかしく感じた所である。我々は又雪嶺の人物論が比較的公平なのを快く思つた。雪嶺にも勿

論好きと嫌ひはあらう。雪嶺の人物論にも一種の愛憎論が無いとは言へない。たとへば西郷を大に揚げて大久保を抑へた形のある如きは我々の同感し難い所である。雪嶺の人物論は或は淺薄とも云へやう、或は皮相とも云へやう。さりながら不公平とは云へない。雪嶺は如何なる人物も敵視しない。雪嶺は黨派の人では無い。従て雪嶺の人物論には黨同伐異の傾向はない。西園寺内閣も桂内閣も博士に在ては何れを愛し何れを憎むのでもない。桂の不人望が絶頂に達した時でも雪嶺は西園寺内閣と桂内閣とは智慧の度に於て優り劣りはないと公言した。『桂内閣には割合に勇あるものが居る。なくとも勇氣あるかに似すものがある。それだけ善惡に關はず仕事をすると云へるとさへ言つた。藩閥の、民黨のと云つて人に依つて直ぐ

愛憎を定めないて總ての人を公平に取扱ふ雪嶺の態度は讀者に快感を催させる。殊に面白いのは雪嶺の談話の『ユーモア』に富んだことである。博士は人を論殺しない。追究しない。雪嶺は氷のやうな冷笑を、其惡むものにあびせ掛けない。雪嶺は斯う云ふ場合でも唯だ微笑するのみである。雪嶺は勿論皮肉屋である。善く人間の弱點を知つて居る。雪嶺は斯う言つた。『天真爛漫と見えてそれ程天真爛漫でないがあり、天真爛漫と見えせずして案外天真爛漫なのがある。容易な態度ばかりが天真爛漫だが心の奥の陰險なのがある。』(天真爛漫)

『苦蟲を噛み潰した様な顔をして居るのが、心が眞面目であるとは限りはせぬ。案外横着で當てにならぬのがある。……人が鹿爪らしいのは好

まぬのは單に面白くないと言ふばかりではない。往々腹の黒い偽君子などもあるので當にすることが出来ぬからである』(眞面目)

併し雪嶺は斯う云ふ反感を露骨に言ひ現はさない。雪嶺は其感情の火に灰をかけることを知つて居る。雪嶺は政治家を兼ねる實業家に就て語つた。「性質の似たものならば、幾十の會社を兼ねて綽々餘裕ありと見えるのである。左右の手で丸を描くやうなものであつて、成し難いことでない。併し右の手で丸を書き、左の手で四角を描くのは難かしい。……實業家で政事家……二つ兼ねることが容易でない。』

何と面白い説教振ではないか左の手で四角を描きつゝ同時に右の手で丸を描く。それは勿論むづかしいことである。實業家が半心、冷心、輕心を

以て政事家を兼ねようとするこの馬鹿らしいのが直ぐ分る。別段面倒な議論をしなくても、何人も成程と合點する。雪嶺は唯だ微言を以て諷した計りである。しかし其人心に及ぼす結果は堂々たる大論文に勝つて居る。雪嶺は寡言の人であると聞いた。寡言と機智とは多くの場合に於て同じ腦髓に伴ふものである。雪嶺は誠に機智に富めりと謂ふべきだ。斯う云ふ機智に富める學者の口から

「常識と云ふ語は餘程廣がつて、今は殆ど何處でも通用して居る、翻譯語と思はれぬ。明治十年頃東京法學部教授井上良一氏が激しい演説をなし、誰々はコンモンセンスが無いと云ひ、ついで大學部内にコンモンセンスの語が行はれ、彼はコンモンセンスが有る。是はコンモンセンスが無い

など、言ひ合つた。』

など、云ふ昔話を聞き、それからそれへと話の蔓を延ばし、問題から問題に移つて博士の頭に潜んだ接物處世の教訓を學び得た社會は幸福を感じずには居られない此點に於て我々は『世の中』を歓迎する。

(三) 現状維持の平凡なる教理

書物其もの、成立した來歴は同時に其内容を語る。此書は雪嶺が其哲學で語つたものには無い。此書は雪嶺の政論でもなく國家、社會の存在する理由に關する雪嶺の辯解でもない。此書は唯だ『實業之世界』記者が題を課して雪嶺の答を求めた答案である。その論題は主として物に接し世に處

する實行？ 道德の範圍に限られて居る。斯うした性質の書物に對して主義を求め、哲理を求めめるのは船中の心得書に向つて船の構造の知識を求め、或は風波の起る原理を尋ねると同様であつて畢竟見當違であると言はねばならない。實際此書の中には哲學は無い。雪嶺の政治主義もない。現在の政治、社會、道德に關する根本的の批評は無い。此書の筆者はそう云ふ深遠な問題に就て興味を持つて居なかつた。従つてそう云ふ問題で以て雪嶺に迫らなかつた。彼は現在の道德律を其儘正しく尊ぶべきものとして受取る人と假定してそうして雪嶺の助言を求めた。故に雪嶺も現在の道德律を其儘受取る人として答へた。雪嶺は死後の名と云ふとに重きを置いた。『明治時代に贈位沙汰が多い。是れ概ね生存の當時價值以下に見られて居

つたのが價うち相當に見られるやうになつたのである。徳川時代に榮耀
榮華して今日全く知れないのが幾人あるか知れぬ』

『星は悪評を蒙り、終に議事堂で殺されながら今日猶ほ人に惜まる』

斯う云ふ様な種類の語は此書にはいくらもある。雪嶺と雖も死後の名と云ふものが何故左様に貴重なるものである乎と云ふ問題に對して根本的の疑問を投げ掛けられたらば或は死後の名は生前一杯の酒に如かずと云つたエビキユリアニズムに思ひ到つたかも知れぬ。しかし此書の中に現はれた雪嶺は古い古い倫理學に執着し世間並に死後の名に絶大の重量を加へて居る。是は雪嶺が哲學者でない爲ではない。彼は俗人の俗な問に對して同じ水平に立つて答へて居るのである。マキヤベリは自由を愛するものであつ

21 現狀維持の平凡な教理

たが専制家の爲に其位置を維持する秘訣を説いた。此書の雪嶺には哲學は無い。政治學の根本義もない。彼は唯だ國家を尊敬すべきものとし、功名を貴重すべきものとし、人生を生活すべきものとする現狀維持の平凡な教理の上に立つて接物處世の要道を説いて居る。彼は言つた。『大乘を持出せば誤解されて害になる』と。彼は大乘を持ち出さない。彼は唯だ問ふもの、水平に立つて彼等の行ひ得べき小乗を語つた。小賣店は問屋では無い。渡世の道を講ずるのは社會主義の批評とは違ふ。此書に現はれた雪嶺には哲學もなければ、主義もない、彼は唯だ洒々落々たる常識の學者であると云ふならば、それは書物の性質を知らない酷論であらう。

(四) 小さい樂天主義

然らば則ち此書に現はれた雪嶺の思想が淺薄な樂天主義、物質主義、成功主義に満ちて居ることは敢て怪むに足りない。雪嶺は煩悶に就て斯う云つて居る。

「一度煩悶し、或は大に煩悶し、其の煩悶に屈せず、遂によく解決するのは恰も地盤を固めた上に尙ほ固めたやうなものであつて、其上に建築した家屋である。」(不平及び煩悶)

「昔から大に煩悶して、然る後に堅固な意思を以て事業に従事した例に乏しくない。煩悶したならば必ず何等の解決を得て煩悶より免るべきであ

る。煩悶に囚はれて絶へず煩悶するを生れ甲斐なかつたとすべきである。(不平及び煩悶)

さりながら斯う云ふ様に煩悶は必ず解決に達すると云ふ前提を置いての煩悶ならば煩悶は寧ろ樂むべきものであつて悲むべきものでない。煩悶の苦痛は其到達點が不可解であるが故に存する。煩悶は必ず解決されるものと豫期するは樂天主義であつて、それなら始から煩悶するにも及ばない、雪嶺は又斯う云つて居る。

「世の中は人の思ふやうになると限らぬ。智慧があつても零落し、愚物でも立身出世するものもある。が世の中は不公平なやうで案外公平である。智慧があつて零落するものもあるが、零落に拘はらず、ピン／＼して己

まなんだならば必ず相當に認められる日がある。僥倖で立身出世したものの、右に出来ることが出来る。(不平と煩悶)。

『世の中は不公平なやうで案外公平である』と雪嶺は云ふ。さりながら世の中は眞實雪嶺の云ふ様に公平であらう乎。公平が世の中に行はれて居るのであらう乎。人間の歴史は弱肉強食の歴史であつて、現代の人間の多數はやはり一種の奴隷では無からうか。高材逸足の士であつても現在の經濟組織に在つてはどうしても零落の淵に沈まねばならないやうな仕掛けになつて居るのではあるまい乎。しかし此書の著者たる雪嶺は大乗を語らぬ雪嶺である。彼はそう云ふ問題に踏み込むべき自由を持って居らない。彼は又そう云ふ問題に踏み込むことを好まない。故に彼は煩悶は必ず解決に達すべき

ものとし、人生は案外公平なものと定めてそう云ふ小さな樂天主義の上に立論して居る。彼は又斯う云つて居る。

『己、自ら悪人でないと思ふが如く、人もさう悪人でない。世間に鬼はないと見る方がよい。何れかと云へば鬼は己の心で作るものである。鬼が居らねば、びく／＼して世渡りするだけ損である、平氣の平左衛門で面白可笑しく通つて行くに越したことは無い。』(天真爛漫)。

是れ亦小さい樂天主義の顯れである。世間を信ぜよ。世間に鬼は無い。人生は鼻歌を歌て通るべき者である。斯して彼の世界には煩悶もなく、不平もなく、残酷もない。貧富貴賤の懸隔はあるが、それも彼には苦痛では無い。

『財産があり家柄が善ければ御坊さん育てて他の智力あるものに譲ること

になる。……それで世間が循環し廻り持ちになるのであらう。然らざれば貧賤に生れたものは遣り切れぬ次第である。世間はよくしたもので、困つて居れば困つたゞけて何か善い事があり、都合が好くなれば好くなるだけ、何か好くない事が伴ふ。(眞の力)

俗の諺に云ふ世間は廻り持なるもの則ち是である。哲學者たる雪嶺に取つては是は勿論小乗であらう。さりながら問題を提供した筆者が小乗の機であつて見れば大乘を説く譯には行かない。雪嶺は斯うして唯だ小乗を説いた。此世は生活すべき價値ありと定め、現在の道徳、政治、社會の規律と慣例を重んずることを思想の出發點とした課題に對しては雪嶺も唯だ斯うした樂天主義を説かざるを得なかつた。

(五) 到底一種の成功論 (上)

斯う云ふ小さい樂天主義に立脚した雪嶺が一種の成功論を以て此書の全篇を彩つて居るのは勿論已むを得ないことである。此書には良心の色彩もなく、道義の馨香もない。勿論此書にも犠牲の必要を説いた所もある。

『一方には石炭が消滅し、一方に電燈は輝く、何事をか起すには、何事をか損をする。何事をも失ふことなく、唯だ得ばかりすると云ふことは有り得べきでない。いくらかの犠牲は普通のことである』(犠牲)

是れ彼の犠牲論である。彼は又善人が國家社會の利益の爲に犠牲になる場合を説いた。

「世間の勢が右に傾く事がある。或は左に傾く事がある。右に傾けば之と共に右に傾き、左に傾けば之と共に左に傾くべきであらうが、それは中庸を行くのでなく、單に勢に従ふのである。國家又は社會の上から見れば、左に曲れるを直すには先づ右に枉げねばならぬ。右に曲がれるを直すには先づ左に枉げねばならぬ。國家又は社會の上から見て中庸を忘れて居るのであるが世間の勢に反する事になる……昔から善人で重い刑罰を受けたものは少くない。(常議)。

彼は中庸を行ふ温厚の君子でも國家、社會の利益の爲には身を犠牲にすべき必要があると説いて居る。人は功名と、人望とに超越して、道德的の飛躍をなすべき場合の在ることも亦彼の認めたる所であつた。

「功名を念とすれば勢力ある者の意を迎へ、或は世間の意を迎へたりすることになる。すると一時高い位置に引立てられたり。或は世間から持囃されたりするが、詰り尋常の水平線より以上に出ることが出来ぬ……」

「身を捨て、こそ浮ぶ瀬もあれ」といふ。功名心を捨てた方が功名を獲らるゝこともある。斯くせば排斥されまいか。悪く言はれまいかと心配して居ては成し得る所知る可きである。功名富貴はどうでも善い、悪人と言はれやうが、逆賊と云れやうが、我心自ら知ると云ふ調子で捨身になつたのに後から大に稱揚せらるゝのがある。(功名心)

此通り彼に功名以上、人望以上の道德を説かぬのではなかつた。彼は又自分の利益にのみ執着せず天下國家を憂ふるとに敬意を拂つた。彼の眼よ

り見れば濫澤榮一男が場合に依つては政府の財政策を非難し、森村市左衛門氏が上から風儀を亂して下に及ぼすを心配するのは大倉喜八郎氏、安田善次郎氏が自身の事業の發展にのみ汲々たるに比すれば其人品を一層高尚ならしむるものであつた。故人山岡鐵太郎氏が、事苟も君國に關すれば心配して已まなんだのは彼の其人物を尊敬する所以であつた。彼は西郷南洲が常に日本の國威の外に延びないのを心配し、如何にして露國に當るべきかと云ふことに苦心したのを以て其人物の偉大を證すべきものとした。自身の關係した事業をのみ樂觀悲觀して天下國家を思はないものは彼の小人視する所であつた。(悲觀樂觀)。そして彼は斯う言つた。

「如何に才能に富み、行くとして可からざるなしと云ふものであつても、

自分の事ばかり思つて居ては大に伸びることはむづかしい」(大才、小才)

彼は同情の廣く大きいものを以て偉人とし、何人にも其同情の區域を狭くしないやうに要求した。斯う云ふ點から見れば彼は犠牲の價値を知らないものではない。殊に此書の全篇を通じて死後の名を重しとする舊い道徳に固執する傾向の著しいのに依るも、彼は固より得を取るより名を取ることの貴いのを知らないものではない。

「善い人物でも善い事をして遂に世に認められずに終ることもあるなれとも、眞の善い人ならば出来るだけのことをしたので、それで満足すべきである」(不平と煩悶)

彼が純粹の物質主義者で無かつたことは明かである。さりながら之と同時
時に此書に現はれた全體の傾向が成功を求め、成功を樂み、成功に達する
道を説くに在ることは勿論である。此書の筆者は彼に向つて成功論の講義
を求めた。彼の説く所が到底成功論に始終したのは免れない數である。

(六) 到底一種の成功論 (下)

雪嶺の此書を通じて世に與へた教訓が到底一種の成功論であつたことは
雪嶺の人生論を見れば分る。人は如何にして此世に生れた乎。人は如何な
る目的に向つて進むべきものである乎。そう云ふ哲學的問題は此書に現
はれた雪嶺が解釋を試みた問題では無い。雪嶺は唯だ

『生甲斐ある生活』とは其人の生れたのが生れなんだのより善いと云ふこと
が確かたなくてならぬ』(意義ある生活)
と云ふ軽い詞で此大問題を一掃して居る。此處に云ふ『生れたのが生れ
なんだより善い』と云ふ其所謂善いとはどう云ふ意味である乎。雪嶺は又
斯う云つて居る。

『人はわづかなりとも世の中の進歩に與からなくてはならぬ』(意義ある生
活)

そうして見れば善い生活と云ふのは世の中の進歩に與る生活と云ふ様に
聞へる。然らば世の中の進歩と云ふのは何か。進化論者は宇宙は進化の理
法に従つて發展して行くと云ふ。此發展が則ち進歩である乎。然らば則ち

人間は悉く世の中の進歩に與るべき約束を免れ得ないものであつて世の中の進歩に與る生活と云ふのは即ち人間の生活其ものであつて、人間の生活の中に世の中の進歩に與らない生活と云ふものは無い筈である。若し又進化論者の發展には世の中を善くするものと、悪くするものとあるならば其善悪は何を標準にして定めるのである乎。哲學的に論究すれば結局茫然として自失せざるを得ない。しかし此書の雪嶺はそんな思想の藪には深入しない。雪嶺も實は幾分か自語相違に陥て居る。たとへば

「華族……生れなんたらば家斷絶と云ふことになるのであつて、家の維持から言へば低能兒でも生れ甲斐が有たとすべきである」(意義ある生活)と云つたなどは則ちそれである。低能兒でも家の血脈を繋ぐと云ふ點か

ら見れば雪嶺の所謂「生き甲斐」があるものだとする天下に何人か生き甲斐の無いものがある。豊太閤は名も無き匹夫の子であつた。何人も祖先の名も無い匹夫たるが爲に子孫に英雄が出ないと定めることは出来ない。然らば則ち如何なる愚人と雖も其生れたのは無意義でない。若しも彼等の血脈から英雄兒が出て得ると云ふ可能があつたならば彼の愚なる卑むべき生涯はやはり生き甲斐のある生涯であつて彼の生れたのは生れなんだより善いのである。斯う云ふ風に論じて見れば人間の生活に生き甲斐のある生活で無いものは一も無く、雪嶺の人に向て生き甲斐のある生活をせよと勧めることは結局茫漠たる空言に陥てしまふ。しかし此書の雪嶺はそんな面倒な理窟は言はない。唯だ「生甲斐のある生活をせよ」。「わずかなりとも世の

中の進歩しんぱに與あつかる生活をせよ。』他人の爲す能はざる仕事をせよ』と勧めて居る。そうして此漠然ぼくぜんたる訓戒くんかいが讀者の心には必しも漠然ぼくぜんとして捕捉ほそくすることの出來ない空言くうげんと聞へず、却て『人の世界に生れたのは何事かする爲である。故に我等は何事か爲さねばならぬ』と云ふ感動かんどうを與へるのは不思議である。雪嶺は更に進んで『何事か爲せ』と云ふ教義けうぎを布演ふえんし

『他の人が爲し得ることでも先んじて爲さば、そんだけ世間に新たなるものを供給ききょうするので、他の人をして別の方面べつ ほうめんに働かしむる利益りえきがあるのである。若し其事が其人に限り、他人の容易よういに爲し得ない事であれば、其人はいよいよ生き甲斐がひあるとすべきである』(意義ある生活)
人は生れ乍やがら活動くわつどうの本能ほんのうを持つて居る。人はぢつとして居られぬ動物どうぶつで

ある、『天の我を生む偶然ぐうぜんならず』とは人の活動くわつどうの本能ほんのうから出て更に之を刺撃けきする格言かくげんである。雪嶺が何事か爲せ、他人の容易よういに爲し得ないことをするのには最も生き甲斐がひある生活せいかつであると人類じんるいに勧めたのは正に人類に人類の如くなれと説教せつけうしたのである。猿さるに木上りを教ふるのは自然しぜんであつて、しかも甚はなはだ有効いうかうである。儒教じゆけうからカールライイズムに至るまで活動くわつどうを教ふる教をしへは人の耳こゝろに快こゝろよいものである。雪嶺の説教も此點に於て人類じんるいの本能ほんのうに投とうしたものである。何故に人は働かざるべからざる乎。人の働さに向つて進む最後の標準へうじゆんは何である乎。そう云ふ問題は此書の雪嶺の論ぜざる所であつて一たび陥おちつては如何なる思想家も容易よういに脱出だつしゆつすることの出來ない藪である。雪嶺はそう云ふ問題に觸れず、唯だ漠然ぼくぜんとして何事か爲し、進んで爲

せ、敢て爲せと説教した。雪嶺は是に於て到底一種の成功論者たることを免れない。雪嶺は言つた。

「たゞ生き長らへただけでは生きても死んでも社會と没交渉である」(眞の力)

雪嶺は勿論「生き甲斐あるとは廣く人に崇拜せられねばならぬと云ふこととは無い」ことを知つて居る。しかし社會に對して何事もせず、獨りて生れて獨りて死ぬ寂寞の生活は雪嶺に取つては生き甲斐の無い生涯である。

(七) 古典時代の人生觀

さりながら此書の雪嶺と雖も勿論物質の成功をのみ成功とする者では無

い。雪嶺は人が自身の爲に積み得たものを以て其人物の高下を測るべき標準にしない。

「位、人臣を極め、富天下に冠たりと云ふ程の者が有るか無きかに見られて居るのが多いのは何故である乎。是れ富、其者、財其者が人間を計るべき尺度でない證據である。人間を計るは其働に在る」(成功失敗)

「人は働きと云ふことに重きを置くべきである。此意味に於て科學者とか文學者とか云ふものは富貴の點から云へば殆ど悉く失敗者であるが、しかし失敗者と見られずして成功者と見られて居るものが少くない」(成功失敗)

雪嶺の意味に従へば成功とは多く働いて社會に何事をか寄與した者のこ

とてあつて自身に何物をも積んだことでも無い。此點に於て雪嶺は絶對的に個人主義者と行方を殊にして居る。此書の全篇を通じて個人主義の片影だも發見することの出來ないのは寧ろ異とすべきである。雪嶺は人の價値を其社會に及ぼした事業の量と性とに依て定める。雪嶺は何事も社會に貢獻しないものを價値なき人間とする。雪嶺は社會の爲の人として人を見る、個人の爲めとしての社會を見ない。斯う云ふ雪嶺の人生觀は歐羅巴ならば古典の時代の人生觀だとも云へる。個人が醒覺したと云はれて居る現代に於て雪嶺の斯う云ふ態度は新思想を喜ぶ青年に取つては不思議に思はれやう。或は時世に懸隔した珍品として取扱ふものがあるも知れない。しかし雪嶺に取つては斯う云ふ人生觀を造つたのも蓋し已むを得ないことであら

う。何となれば雪嶺は現代の國際的關係に就て深き憂を抱いて居るからである。

『昔は亂世の次に治世、治世の次に亂世、その亂世の次に又治世と或る期間を隔て、大浪の打ち來たつたであるが、今もどれだけかさう云ふ跡形のあるにせよ。各方面より大小の浪の打て來つて亂世と治世とを區別し、治世だから差支がないなど、安心して居る譯に行かぬ。亂世の卸賣が無くても絶へず小賣りがある、いつから創業、いつから守成など、分ちやうがない。』（創業守成）

雪嶺自身の詞を借りて言へば『現代は眞劍勝負、競争の激い、死物狂ひの世』である。昔は各藩の間に競争があつたが、今の列國競争はそれよりも

ずつと激しい。我々は此劇烈な生存競争を意識しなければならぬ。

『前に各藩互に競争したやうに、今一層明かに列國民族を競争を意識するやうにすべきである。と言つて唯だ國家的に口喧しく言ふべきで無い。

世界で最も活動して居る國の人民が如何に働いて居るかを示すべきである。』(奮闘の意氣込)

雪嶺の目に映じた獨逸は米國と共に個人の大に働く所である。まめに働いて少しも利益を追さない。一錢一厘も苟もしない専門的に分業して勉強する。他國が利益を得る場所と見れば直ちに割込んで競争する。他國の商品を模擬して顧客を奪はうとする其態度は齷齪たるものであるが其勤勉は恐るべきものである。何事も苟もせず、何事も全力を注ぎ、塵も積んで山

を作るのは獨逸の長所である。我々はそう云ふ國と商戦上に馳驅せねばならぬ。(奮闘の意氣込) 雪嶺は又米國に就て斯う言つて居る。

『米國は世界に於ける成上りの國であるが進歩國と云ふよりも急進國と云ふべきである。既に西半球を以て足らずとし頻りに力を東半球に伸ばさうとして居る。其獎勵する所は努力奮闘に在る。實は猪突猛進とも云ふべきである。寧ろ猪突猛進の極端なるものと云ふべきである。日本に於て之と對抗するには勇氣に於て之に劣るやうなことがあつてはならぬ。』(猪突猛進)

世界の人個人としても國としても斯うしても我々を壓迫する。我々は働かなければ亡びねばならぬ。現代は諸民族が死力を出して生存競争に従

事して居る戦場である。雪嶺の眼には世界は斯う云ふ修羅闘場として映じた。獨り雪嶺のみでは無い。徳富蘇峰君などにも世界と日本の位置は斯う云ふ風に映じて居る。日本思想界の中老から見れば現代の世界に於て極めて著るしい現象は唯だ是れである。然らば則ち雪嶺が此點に深い執着を持つて居るは敢て怪むに足りない。

『國の働きは畢竟するに個人の働である。個人のみに働くところでは國としても働さが伸る。比較的多く働くものは世界の上で比較的多く勝つ。其最も目覺ましいのは東に米國、西に獨逸である。この二國の人民が働く如く働かなくては將來之に負けることになる。現に此二國は東亞細亞に頻りに目を注いで居る。手をつけて居る。而して是れ唯だ政府の力でな

い。個人として活動しやうと云ふのである。其勢は頗る急である。故に之に對して負けぬやうにすべきであるが、文部省始め學校は其邊に氣をつけぬ。唯だ形式だけの事をして居る。』(奮闘の意氣込)

民族の競争に重きを置けば社會(民族)の爲の人として個人を見ざるを得ない。社會の幸福則ち民族の幸福の爲に何物をか寄與した者は則ち生さ甲斐のあるものである。希臘の小さい諸共和國では一旦敵國の侵入を蒙れば個人の財産は直ぐに亡びてしまふ。そう云ふ國では國を守ることが則ち個人を守ることであつて自然に社會(國)の爲め人として人を見るやうになる。古典の道徳が社會に寄與した功過を以て人を評價したのは餘儀ないことであつた。雪嶺の眼から見れば現代は諸民族の關係が切迫して來た點に

於て、交通機關の發達が世界を縮めたことに於て、自ら希臘の小國並立の時代に似て來た。希臘の古に於て國の利害が個人の利害と分つべからざる一體であつた如く、現代に於ては民族の利害は個人の利害と分つべからざる一體である。別して強い民族の壓迫を受け易い我々にそう云ふ感の深いのは免れ得ない數である。雪嶺が社會に提供した事業の價値を以て人物の價値を定めやうとするのは雪嶺の位置としては已むを得ないことであらう。斯うは言ふものゝ雪嶺は必しも國家萬能、若くは民族萬能を唱へて個人を其存在と發達の犠牲に供すべしと論じたのでは無い、此書に現はれた雪嶺にそれ程の意義が有るとは見へない。此書に現はれた雪嶺は倫理學に於て一のスクロールを持つて居るものではない。唯だ雪嶺の議論の傾向は斯

うてあると言はざるを得ない。雪嶺は斯う論じて言へる。

「偉くなつたとて下らぬてはないかと悟を開いた様にするのは列國競争の激しい世界では禁物であると言つてよい。……働き盛りの若い者は偉くならうと云ふ氣が無くなつては少し心細いでは無いか。」(功名心)

「列國競争の激しい割合に、我が内地の人は餘りに小成に安んずる傾向がある。功名を構はぬとすれば益す小成に安んずる。のらくらする。大乘を持出せば誤解されて害になる。努力奮闘を促すには小乘的に功名を熾んにし彌が上に熾んにするやうに努む可きである。」(功名心)

雪嶺は哲學者である。さりながら此書の雪嶺は哲學を危険視して居る。哲學の爲に我民族が競争場裏の勇者たる資格を失はんことを恐れて居る。

昔の獨逸の哲學者は書卷を擲つて祖國の自由の爲に戦つた。此書の雪嶺は激烈な民族競争に出陣する爲に日本人をして大乘の覺りを捨て、小乗の功名に其心を熱からしめんとした。雪嶺の思想の傾向は益す明かである。

(八) 活動主義

民族と國家の繁榮を以て人事を律すべき標準とするに於ては雪嶺も日本帝國の文部省も殆んど同じ立場に立つて居る。雪嶺と國家教育の當局者との差違は主義の差違ではない。たゞ國家教育の當局者は主義を明かにして之を我々に強んとし、雪嶺は世界の形勢を説いて我々を同じ方角に誘ふと云ふ相違があるだけだ。しかしながら國家教育の當局者は理論に於ては

博士よりも明白に犠牲を教へ、忠孝を説き、世界に於て我々の立場を堅定すべきことを命ずるけれども我々を刺撃する態度は比較的冷かであつて、しかも甚だ多く形式に拘泥する。雪嶺は之に反して卒直に、自然に、我々の奮起を促す。雪嶺は民族の競争場裡たる此世界を火事場のやうに見て居る。國家教育の當局者は民族の爲め、國家の爲に戦ふことを唯だ一種の教理のやうに教へる。此點に於て雪嶺は却て當局者の如く、國家教育の當局者は却て批評家の如くである。雪嶺は世界を戰場と心得て居る。眞劍勝負の戰場と心得て居る。故に雪嶺は我々に活動を要求する。雪嶺は我々に哲學者たるべく要求しない。我々に坐して考ふべく要求しない雪嶺は只だ起て働けと云ふ。

『大才と小才と、大なる差別があるやうであるが事は如何にあり、之を處置するに、如何にすべきかは常識ある以上、大抵解かつて居つて或る特別の人が大才を揮ひ、多くの人は唯だ小才を事とするに止つて居るの観あるのは才の如何はわからぬ。腕のきく、きかぬよりも、決断すべきに決断し、目的を達する迄、堪へ忍ぶかどうかと云ふ所にある。』(大才小才)

唯だ断すべし、断じて爲すべし、忍耐して之を遂ぐべし、智慧は此活動から起る、大才は多く此活動の生む所である。是が雪嶺の論旨であつた。雪嶺は又斯うも言つて居る。

『今の世に守成なんか餘計な事である。創業に次で又創業、又々創業、絶

えず創業で續くべきである。』(創業守成)
働け、働け、創造せよ、創造せよ、創造を以て汝の生涯を貫けとは雪嶺の我々に與へる號令である。

『考ふるはよい。出来るだけ考ふべきであるが考ふるに際限がない。或る邊に思ひ切りを付けねばならぬ。その思切りが肝要である。考へ足らずして思切りの誤ることもあるが、多數の上で言へば思ひ切りのよいものゝ方が遙に多くの事業を成し遂げて居る。』(猪突猛進)

『人を知る事は難いが自ら知る事も難い。自らの短所を知り難いばかりでなく、自らの長所をも知り難い。案外長所の潜んで居るのも知らずに過ぐることもある。奮發次第、努力次第で現はれたりする。運命で致し

方ないと見えた時、一奮發すれば致し方ない運命でなく、致し方ある運命となることが多い。』(運、不運)

考へるも善いが善い加減で思切つて活動せよ。活動は自身も知るとの出來ない自身の長所を顯露し來るものだ。命窮り、力盡きたと思ふ時、活動の飛躍に依て新しい運命を開くこともある。雪嶺は眞に活動教の使徒といふべきである。雪嶺は活動主義の使徒であつた故に同時に拙速主義の使徒であつた。

『ある機會が來て考へ込む。考へ込む間に機會を去つてしまふ。後になつて早く着手すれば宜かつたと思ふことは珍らしくない。後からなか／＼好い考が出る。何人も及ばぬやうな好い考が出るが所謂、下司の智慧は

後からと云ふ状態である。』(熟考と即斷)
雪嶺は拙速主義者なるが故に同時に突貫主義者である。

『プロツホは武器の進歩、戰略戰術の進歩より推し、或る距離以上に進むを得ず、之を踰ゆれば全滅に歸すると云つたが、實際の戦争は最後の勝敗は銃槍を以て決する外はない。是が爲に兵卒の勇氣が甚だ肝要である。之が爲に吾が歩兵操典にも改正を加へた。突貫して勝たずんば再び突貫せよ。尙ほ勝たずんば又突貫せよ、最後の一人の仆る、まで突貫せよと云ふことを教へて居る。』(猪突猛進)

『日本の陸軍が三十七八年の役に悟り金科玉條とするは何であるか。突貫せよ。何回にても突貫せよ。悉く死するまで突貫せよと云ふのである。』

志す所あれば何でも繰返すべきである。』(得意失意)
 博士は突貫主義者なるが故に『困難に興味あり』と主張した。
 『本當に眞から働いて居る人は、實は成功とか失敗とか云ふことを通り越して居るのである。彼の聯隊旗の如き破れて折れたのが榮譽だとされて居る。是は幾つも彈丸が中つた標があるからで、斯様に幾回も或る意味に於て失敗して却て榮譽と見るべきものである。小説でも、芝居でも、唯だ目出度し目出度しと云ふだけでは面白くない。浮沈變化の種々の相が現はれて初て興味がある。世に七轉び八起きと云ふ事があるが人間の働きは其邊に現はれやすく、又其當人及び傍觀者にとつても其方が興味のあることだ。』(成功失敗)

民族の生存競争が極めて激烈なことを見た國民教育の當局者は國民に規律と、節制と、訓練と、秩序と、中心に向ふ一致とを與へやうとして其所謂國家主義の教育に努力して居る。彼等は唯だ『靜肅に汝の線を守れ』そして命令を聽けと教ふる、同じ世界の大勢を見た雪嶺は活動せよ、突進せよ、餘り多く考へるな、坐つて哲學に耽るな。唯だ活動せよと教へる。雪嶺は『常に汝の線に止るな』常に一步を前方に轉ぜよと教ふるものである。然らば則ち此二個の教師は矛盾した教理を右左から國民に強ふるものであらうか。そうでは無い。

(九) 全體の統一、部分の獨立

詮じ來れば此書に現はれた雪嶺は新らしい主義を宣守する傳道師ではな
 い。彼はイブセンでも、シヨーでも、ニツチエでも、カール・マークスでも
 ない。彼はやはり傳來の道德を固執する古い教師である。我々は此書に於
 て毫も新しい思想に接することは出來ない。此書は我々が煩悶して居る新
 舊主義の衝突に就て何等の教訓も暗示も與へるものではない。此書の底に
 横はる思想は國家教育の當局者の根本思想と何等の差違がない。さりなが
 ら我々は現在國家教育の當局者が國民を率んとする態度が形式の整正と、
 規律の單調を重んじ同時に意氣稍や沈み勝ちなのに反し、雪嶺の國民を率
 ゆる態度が活潑で愉快で意氣の盛んなのを驚かざるを得ない。國家教育の
 當局者は我々を一定の鑄型を固まらせやうとする、雪嶺は我々を一定の鑄

型から溶け去らしめやうとする。斯うした對照はどうして起る乎。此書の
 内容は其理由を示して居る。一言にして言へば雪嶺は全體の統一を教へる
 と同時に部分の獨立を力説し、國家教育の當局者は部分の獨立を犠牲にし
 て全體の統一に献せしめんとするからだ。雪嶺は全體の統一に於ては異論
 は無いが同時に部分の獨立に就て深き興味を持つて居る。國家教育の當局
 者は部分の獨立を全く否定するのでもないけれど重きを全體の統一に置
 く。廬山の面目を横からも見、縦からも見る。二者の意見が同じ基礎に立
 てしかも全く違ふやうに見へるのは之が爲である。雪嶺は勿論個人主義者
 と云ふべきでは無い。さりながら雪嶺は活動の根原は自主の人格にあると
 信じて居る。

『元氣のあるものと無いものと自ら社會しゃくわいに立つて爲さねはならぬ、必ず成し得ると信ずると否とにて分かれたるのが普通ふつうである』(元氣)。

『人に使つかはれ、使はれして立身したものは使はれねば働き得ぬやうになつて来る』(元氣)。

『力を伸ばさぬのが習なとなれば元氣が無くなる』(元氣)。

『思ふ存分に働くものは元氣があつて、且其元氣が永く續く。』(元氣)

人は何故に老ゆる乎。自ら力を伸ばさない習慣しふくわんに制せられて其才を壓するからである。活動くわつどうの淵源えんげんは自主に在る、自由に在る、己の力で己の運命うんめいを開拓かいたくする所に在る。

『己の力で己の運命うんめいを開拓かいたくするものは安する所が多い。失敗しても失望しつぱうせ

ぬ。又振ひ起ることが出来る。少くとも振ひ起る希望きぼうに満ちて居る。人の力に依りて位置ゐちを得たものは其人の浮沈ふちんと共に浮沈し、動もすればみじめな目に逢ふ』(生活の愉快、不愉快)

『(岩崎彌太郎が)若し土佐藩とさはんの力を借り政府せいふの力を借らずに、彼程あんなほどの働をなし得たならば、彼は更に賞すべき人であるが、其邊で差引さしひがねばならぬ。それだけ人物の小さい所以ゆゑである。』(眞の力)

雪嶺ゆきりつは岩崎彌太郎いわさきやたらうが土佐藩とさはんの力を借り、政府せいふの力を借りたのはそれだけ其人物そのじんぶつを小さくしたと云つた。雪嶺ゆきりつは獨立獨歩どくりつどくぽ、自由じゆうの意志いしを以て自主じしゆの活動くわつどうをするものを人物として尊敬そんけいした。そうして雪嶺ゆきりつは個人こじんの獨力どくりよくを以て困難こんんに抗かうし、困難こんんと戦たたかひ困難こんんに勝かつたものを英雄兒えいゆうじとした。

『困難のある所で力を發揮する。困難がよくなると力が發揮せず。折角あつた力がその儘になつて仕舞ふ。』(眞の力)。

『始め實力のあつたものが境遇のよくなると共に實力が伸びず。虚名が高まるやうな恐がある。』(眞の力)。

博士は興味は困難の間に在るとすら説いた、のみながら順境は人力を伸す道で無いとも説いた。

『豊かに育つたものは損である。…碁でも、將碁でも、義太夫でも、謠でも彫様藝と云ふのがある。師匠を取つても悠長に習つたのは、如何に勉強したつもりでも畢竟知れたものである。遂に黒人に及ばぬのである。』(眞の力)

雪嶺は國家社會の活動の源泉に個人の努力に在りとした。而して個人の力は自主自由の位置に立ちて思ふ儘に其力を發揮し得る時に最も活潑であるとした。斯うして雪嶺の見解から云へば雪嶺は個人主義であるとも云へる。しかし雪嶺はやはり我が國民教育の當局者と同じく國家、民族の生存を以て最高至上の標準とする古典主義に執着する一人である。そうして『全體の統一。部分の獨立』とは我々が雪嶺の個人主義的傾向と、その統一主義を調和する爲に造つた詞である。雪嶺は斯う云つて居る。

『軍隊は最も命令が嚴で、最も服従を要する所であるが一部、一部に獨斷專行を許す必要が生じて來た。』(元氣)。

『何事にも、或る範圍内に於て獨斷專行せしむるのは其人の元氣を保たし

ひる所以である。』(元氣)。

『今の處、制限が餘り多過ぎる。人に依らねば事の成し難い社會組織は稱すべきものでない。』(元氣)

全體は統一せねばならぬ。しかも部分は獨立せねばならぬ。社會組織は成るべく個人に獨立運動の餘地を與へるのを以て理想とする。雪嶺の議論が國家教育の當局者と同じ線に立つものでありながら我々が雪嶺の議論に於て自由、寛濶の空氣が比較的が多いことを感ずるのは之が爲である。

(一) 部分の悲觀、全體の樂觀

此書に顯はれた雪嶺は現代の社會組織に對して根本的に何等の疑惑を挿

んで居ない。雪嶺の見る所に依れば所謂社會問題も人類に取つて死ぬる乎、活きるかの實質ある問題ではない。現代の人心を根底から動かして居る。大問題も博士に取つては唯だ教育の生んだ醒覺に過ぎない。

『職業難の喧ましく聞へるのは教育普及の與ること多しとすべしである。前には學問は士分の事であつて農工商は關係は無いことであつた。が、今は何人も小學教育を受ける。中學に入る者も多い。専門學校に入る者も少くない。前に行路難を嘆じたのは學者連であつたが、教育の普及するに連れ、他の階級の人も行路難を嘆ずるに及んだ。其聲が職業難となつて居るのである。人の自覺と云へば自覺といふべきである。(職業問題)』

『米國は其人に較べて土地が有り餘つて居る。食物はいくらもある。然るに職業難の聲が高い。是れ人が職業難と感ずることが鋭いのである。而して其所に出来た書物が入り込んで多少教育を受けた人の間に職業難といふことが問題となるやうになつた』(同上)

『職業難は職業が無くなつて来たよりも職業に従事する人が職業の如何なる状態に在るかを知ることになつたのである。事實の變つたよりも知識の進んだのです』(同上)

佛國革命は佛國の人民が王と貴族と僧侶の專横の爲に他の歐洲人民よりも悲惨の状態に陥つた爲に起つたのではない。佛國の人民は他の歐洲の人民よりは寧ろ善い境遇に居た。併し佛國の人民は所謂佛國文化の御蔭に依

つて早く自分の悲惨なる境遇を自覺するを得た。此自覺が佛國革命の基礎になつたとは史家の數ば説く所である。雪嶺の社會問題に對する見解は此説に類似して居る。古の士族は四民の中で獨り教育のある階級であつた。其教育が生んだ自覺に依つて彼等は行路難を歌つた。今日は平民も教育がある。従つて彼等の受けた教育が生んだ自覺は彼等に行路難を歌はせるやうになつた。彼等の境遇に何等の變化はない。彼等の難儀は昔より餘計になつたのではない。しかしながら彼等は教育を受けたが爲に自分の位置を覺つた。此自覺が社會問題を生じた、少くとも社會問題を生じた重なる理由になつたとは雪嶺の論旨である。そうして此書の雪嶺が社會問題に對する解決は唯だ是かきりであつた。博士は始は人が機械を使ひ、後

は機械きかいが人を使ふ現代げんだいの産業革命さんげふかくめいの結果けつぐわに就ては何も言はなかつた。博士はカール、マークスの資本論しほんろんに説いたやうな資本しほんと勞力らうりよくの關係くわんけいに就て社會主義者の持つて居る見解けんかいに就ても何等の批評ひひやうを試みなかつた。雪嶺は勿論そう云ふ問題に就て何等の見識けんしきもない淺薄せんぱくの人ではない。斯う云ふ問題に就ても雪嶺が注意ちういを怠らない人であることは信すべき理由りいうがある。さりながら筆者の質問しつもんに應じたに過ぎない此書の雪嶺はそう云ふ六づかしい問題に觸れない。此書の雪嶺は社會問題しやくわいもんたいに對して頗る樂天的らくてんてきである。此書の雪嶺は今の社會が噴火孔ふんくわくこう上に舞蹈ぶたふして居るなどは思つて居ない。此書の雪嶺は軽い心こころを以て社會を見て居る。貧富貴賤ひんぶきせんの懸隔けんかくも此書の雪嶺に取つては所謂天下は廻り持まはに過ぎない。

「財産があり、家柄いへがらが善ければお坊さん育ちて他の智力ちりよくあるものに譲ることになるが、それで世間が循環じゆんくわんし、廻り持ちになるであらう。」(眞まの力ちから)。

使ふものと、使はるゝものとの差は博士に於ては均しく圓まの半環はんくわんであつて、二を合せて始て全きものになるのである。他の語を以て言へば使はれるのは使ふのであつて、使ふのは使はれるのである。

『上官が唯だ權威けんゐを持つだばかりでは事が能く行はれぬ。下官よりも一層働いて見せねば總すべてが怠り勝である』(使ふ人は使はるゝ人)

『命いのちずるより頼む方が効がある』(同上)

相互主義さうごしゆぎは人生の常態じやうたいである。如何なる人も人に使はれずして人を使ふ

とは出来ない。如何なる人も人に使はれるのは則ち他の意味に於て人を使ふのである。斯う云ふ原則から云へば階級間の争も自ら熄むべき理由がある。人生には勿論不平がある。さりながら不平の世相は必しも呪咀すべきものではない、却て勇ましい努力と奮闘を生むものである。

『不平がある爲に奮發して努力するならば不平は寶である。不平の大なる程貴い』(煩悶と不平)。

斯く考れば不平も不平とするに足りない。我々は雪嶺の斯うした樂天的の社會觀を『部分の悲觀、全躰の樂觀』と名づけやうと思ふ。雪嶺は必しも社會の現狀に満足するものではない。しかしながら雪嶺は總躰論として社會制度の懷疑家ではない。故に雪嶺は全躰に於て社會問題に對して樂天家で

ある。

(二) 現代を謳歌する人

雪嶺の樂天的傾向は獨り社會問題に於て著しいのみでない。現代の民衆政治に對しても博士はイブセンやニツチエのやうな反感は持つて居ない。雪嶺は寧ろ民政の謳歌者である。

『世間の多數は凡俗であり、平凡であり、少數の有識者ほど物は分らぬ。が、或る複雑なる問題こそ分り難いにしても普通の事は分る。普通の事の分る多數の判断する所は普通の問題に對しては甚だ公平である。』(公平不公平)。

『小數者の判断するところが不公平であつても、多數者の判断する所は公平になる』(同上)

『世間は盲目でない。世間は公平である』(同上)

『議會は餘り公平でない。随分得手勝手の事をする。が。議會がなによりも公平と認むべき事が多い。而して議會に不公平なことがあるにしても、國民全體の意向を考ると自づと公平なことに落ち着く。』(同上)

雪嶺は獨り民衆政治の謳歌者であるのみならず同時に現代に於て社會の道德は最も多く進歩したと信じて居る一人である。雪嶺は斯う言つた。

『國民の品行は昔から段々善くなつて居る。徳川時代よりも明治の方が好い。明治の初年よりも近頃の方が善い。早い話が明治初代の大臣參議は

公然吉原の遊廓に車を飛ばしたものである。爾うして置酒高吟美人の膝を枕にして、盛んに治國平天下經世濟民の事を放談した。それが今日では最早大臣が吉原遊びをすると云ふ事は無くなつた。其かはり待合遊び——藝者買をするでは無いかと云ふ者もあらうけれども、それは一部のものがコツソリするので昔のやうに公然大威張でするのでは無い。

昔、軍人と云へば何處へ行つても随分亂暴狼籍を極めたものである。これが今日ではナカ／＼亂暴などしない、謹直なものである。船員の如きは何うか。昔の人は船乗りといふたばかりで最早直ぐに命知らずの亂暴者を聯想する位である。港に着く度に上陸して、女を買ふ、酒を飲む。爾うしてキット市中を聞がす。處が今日では何うか。女郎買をする金は

あつても酒は飲まない。酒の飲める者でも成る可く節するやうにして居る。船長にしても同様で、彼は酒を嗜まぬと云ふ事が船長として一つの非常に好い條件となつて居る。要するに一般社會は昔に比べて品行が好くなつて來た。

明治初年の學生の中には十六七歳位で既に遊廓に足に向けた者が多かつた、早い者は十三歳位で行つた者もある。尤もそれは其土地にも依る事であるけれども大きい城下で貸座敷の設備のある處では先づ大方そんなものであつた。今日十三位で遊廓に行く者は直ぐ不良少年と認められて感化院に送られなければならぬ、現在高等小學校、中學校位な程度の學生で女郎買をする者は殆ど無いといつても好い。それが昔は殆ど普通な事

であつた。中學生が女郎買をするといふた處で社會も怪まなければ其周圍も日常茶飯の事のやうに思つて居つた。それを今日では既に三十歳に近い専門學校の學生が過つて女學生と戀に陥つたとか藝者買をしたとか云うて社會が喧しい非難をする。學生が腐敗した。青年が墮落したと云ふのは間違で社會道德の標準がそれだけ高まつたのである。一般社會の進歩に連れて學生及一般青年の品行も亦大に改まつて居る。』

此書の雪嶺は此點に於ても亦樂天家である。昔しの政治家は成程公然女郎買や藝者買をした。さりながら彼等は富家翁となるべく私財を貯へなかつた。昔しの軍人も舟乗りも成程あばれものであつた。さりながら彼等はコンミッション取りでは無かつた。昔しの學生は公然遊廓に出入した。さり

ながら彼等は持參金の多い嫁を探さなかつた。昔の町人は卑屈な奴が多かつた。さりながら概して言へば勤儉力行の民であつた。今の實業家はどうか、博士の眼にも今の實業家の驕奢は寫て居る。

『幾人も妾を蓄へたり。妻がある上に每晚藝者買をしたりする。』(品行論)さりながら此書の雪嶺は國民の道德は日に進んで行くと言ふ。此書の雪嶺は要するに時世を謳歌する人である。雪嶺は社會問題の根底に横はる疑問に觸れない。そうして斯くあるべき世は斯くあるべきだとして居るのみならず、斯くあることは則ち進歩であると極めて居る。我々は雪嶺の此時世觀に就て異論を提出しやうとは思はない。雪嶺に取つては小乗に過ぎない此書の議論に對して正直に我々の批判を献じるのは大人氣ない。我々は唯

だ此書の雪嶺は現代を謳歌する人であることだけを記して置く。

(三) 三宅雪嶺は如何なる人ぞ (上)

此書の雪嶺は自ら語らない。我々は此書に依つて三宅雪嶺の如何なる人なるかを十分に想像するとは出来ない。三宅雪嶺論の材料としては極めて不完全である。さりながらこの不完全の材料の中にも多少は雪嶺の面貌の窺はれぬでもない。自ら語らぬ雪嶺は決して意識的に自身の抱負を漏らさぬ。さりながら彼と雖も所謂語るに落ちて覺えず鋒鏑を現はしたと見るべき所がある。我々は此書に於て下のやうな語を發見した。

『普通に實行は理論と相對して居るが、それも當つて居らぬ、理論の發表

が一の實行たる事がある。アダム、スミスが富國論を書いたのは理論の發表たるに過ぎぬ。併し英國の輿論が動いて其云つたやうになり、國家の富を増した所から見れば實行である。是程の實行は類の少いのである。シーレーが大英膨脹史を書いた爲に帝國主義の必要が認められたとすれば實行である。(實行力)。

彼は勿論無意識に語つて居る。さりながら生甲斐ある生涯とは何事が世間の爲に貢獻する生涯だと信じて居る彼に取つては到底書齋の人たる彼は理論即實行の此教義に依て自己の位置を辯護して居るものとも見へる。人の事業は色々區別がある。

『人が紐育に行くとその邊のものはあの人の財産はどの位あるかと評し合

ふ。ペンシルバニヤに行くもあの人の家柄は何であると評し合ふ。ボストンに行く。あの人の學問はどうであると評し合ふ。』(眞の力)。

書齋に籠つて富國論を書き大英膨脹史を書くのも事業である。書齋の人たる雪嶺は此處に其安心立命の地を持つて居るのではあるまいか。彼は眞に理論を以て世に献じ今に猶ほ献じつゝある人である。さりながら彼は同時に世間を解して居る世間の人である。彼は俗人ではない。さりながら同時に俗人の趣味を解して居る人である。彼は斯う言つた。

『活動しつゝあり、進歩しつゝある社會では偉らくならうと力むるのは寧ろ生命ありとすべきである。(功名心)』

彼は書齋の人たるが故に『偉らくならうと思ふ心』を俗として斥けない。

彼は實業家が虚榮の爲に金を出すのをば卑しむべき態度として排斥しない。

『幾何の義捐すれば勳何等に叙せらるゝと云ふので、平生鏹一文も出さぬ連中で金を出したりするものもあるが……全く名を構はぬよりも始末の善い所がある。』(功名心)

彼は第一の善を追ふが第二の善を忘れるものではない。彼は其學問が生んだ理想の爲に俗界の趣味を忘れ、若しくは俗界の越味を呪ふ程の學窮てはない。彼は勿論哲學を語る。さりながら同時に世に居りて成功する道を説く。

『多數より智慧が表はれても邪魔になるとがある。動物には保護色があ

る。人間も餘り變はつたことをすると面倒が起る。御多分に洩れぬと云ふ鹽梅にすれば無事に通つて行かれる。中庸と云ふも其所に在る』(常識)

『目立ながら目立たずに中に優るやうにする所で、常識の効能が現はれる』(常識)

世渡の説教としては真にうまいものである。希臘の大哲學者は嘗て遊女に男をだます手段を教へたと云ふ。彼は哲學者であるけれども世を欺き、世を渡る術も知らぬではない。彼は此點に於て真に古狸といふべきである。彼が書齋の人たる故を以て彼を狷介孤峭、一個の信仰を守つて世間を自身の哲學に伏徒せしめやうとする人物だと思へば彼を見損なつたもので

ある。彼は書齋しよさいの人ではあるけれども、自身の哲學に縛られない。彼は酸すい味あぢを解して居ると同時に甘い味を解して居る。聖人せいじんの趣味しゆみを知ると共に盜賊たうぞくの趣味しゆみも知つて居る。彼の人物に對する批判ひはんを見れば此趣は明白である。彼は最も不人望じんぼうに陥つて、彼の書いて居る雜誌ざっしが所謂惡罵いはゆるあくばをあびせ掛けた政治家の長所をすら認識にんしきした。彼は何人にも興味ゆうみを持つて居た。彼の頭には通鑑細目はない。彼は自分の尺度を以て人を計らない。自分の愛憎あいぞうを以て人物の價を定めない。彼は人間の事業じげふの千差萬別せんさばんべつなるを知る如く人間の快樂くわいらくの千差萬別せんさばんべつなるを知つて居る。

『九尺二間の店賃をなちんも滞り、秋刀魚きんまの干物を珍味ちんみとする連中れんぢゆうもそれ相應さうおうに樂みがある。一杯の濁醪どぶろくで世間を我物顔わがものがはにしたりする。』(逆境順境)。

『九尺二間の裏長屋うらながやに住んで居ても、内は一家團欒いつかだんらん、外は職業しよくげふに忠實ちゆうじつで俯仰ぶげうして恥づるないと云ふ有様では自づと愉快ゆくわいな心が顔に現あらはれ出る。木綿めんの着物きものを着て愉快ゆくわいさうに見えるのはそれである。』(處世術の上手下手)

『土方どかた、立ん坊たちぼう、一二合の濁酒にこりさけにて活惚くわつぼれの眞似まねする所、實に愉快ゆくわい至極ごくに感ず』(生活も愉快、不快愉)

『美酒びしゆ、佳香かかうに慣なるれば別段べつだんに愉快ゆくわいを感ぜぬ。更に一層美しい酒肴しゆかうを求める。それも慣るれば、何でもなくなる。』(同上)

『事業じげふが成立つた時、愉快ゆくわいを感ずるが少し程経れば感じなくなる。更に新なる事業じげふを企て、常に成功せいこうすれば成功せいこうに慣れて愉快ゆくわいを感ずることが少くない。時として困難こんなんを感じ、時として失敗しっぱいする。而して其揚句あげくに漸やうやく成

功する。其所で愉快を感じる。』(同上)

『事業の區域が次第に擴がり、之に依つて己の力が伸びて來れば何時も何程かの愉快を感じる。』(同上)

事業慾は肉慾よりも愉快の度が多い。ワグネルの書いたクンホイゼルは女神と歡樂のある限りを盡した。毎日女神と共に女隊の踊り廻るのを見る。酒宴をした。しかし慣れるに従つて厭が來た。人間が戀しくなつた。快樂は程度問題である。快樂は千差萬別である。所謂世相には悉く興味がある。彼は一の興味に熱して他の興味を忘れるものではない。彼の頭腦は世相の千差萬別なるが如く千差萬別の趣味を解して居る。彼は書齋に住んで居ると同時に世間に住んで居る。

(三) 三宅雪嶺は如何なる人ぞ (下)

此書の三宅雪嶺は一種の鋭い眼を以て世間を洞察して居る。彼は黨派若しくは事業の首領たるべき人物に就て斯う言つた。

『主領となる者は煮ても焼いても食へないものよりは少し御目出でたい方がよい』(おだてに乗らぬ)。

『人に煽てられるのは、或る點に於て人に使はれるのである、使はれると見ゆるものでなくては人を使ひ切れない。』(同上)

『馬鹿げた所で人に窮屈な思ひをさせぬ。人をして喜んで献策せしむる。智惠のある者は一つあれを煽てやらうと云ふ考で出かけて來る。』(同上)

『人に使はれなければ使ふことが出来ない。』(同上)

斯様なことは勿論少し世の中を渡つたものは大抵知つて居る。さりながら彼が故の近衛篤磨公を看破して煽ての利く方であつて、あつらへ向の主領株だと云つたのを見れば彼はたしかに活きた世界を解して居る近衛公が所謂煽ての利く人であつたとは誠に公を解したものでなければ言れない語である。斯うして學者であつたが善く世間を知つて居る。世間の人物の長所も短所も可成り善く噛み分けて居る。政治家には多少の私財が無ければならない、自分一家の始末が出来ないものは國家を治めることが出来ない、一身一家の富を造り、富を治めることを知つて居るもので無ければ一國の財政には當れないと云ふものがある。一寸聞けば尤の論である。さり

ながら彼は必しもそうは限らないと云ふ。彼の説に従へば財政の智識の深淺は其人の趣味の多少に依ることであつて、或人が人物評をすることを好む如く、或人は財政を研究することを好む、そう云ふ人が財政通になる、何程一家の財産を殖やすに熱心でも財政を知らうとする氣がなければ其人には財政問題は微しも分らない、勿論政治家として私財のあるのは悪くない、家の心配が無いだけ好いも筈である、しかし私の貯無い爲に却て清いものもある、さうして私財の多い者は人情の察しが悪く、貧民の負擔に苦しむのが分らなくなる、政治家の事業と私財を積むこととは全く別問題である、唯そればかりでは無い、彼の説に従へば富豪が財産を積み得たのは必しも金儲けの技倆があるからではない、金儲けの技倆よりも金儲けの慾

が深いからである。

『左程技倆が無くても慾が深ければ金が出来、技倆が有つても慾がなければ金は出来ぬ。』(財産家の私財)

或は高利貸をして富豪になつたのもある、或は相場が中つて金の出来た富豪もある。富豪だからと云つて唯だそれだけで政治家になることは出来ないと云ふ。斯ふ云ふ議論はどうしても書齋の人の口から出る詞ではない。彼の呼吸はたしかに實世界に通つて居る。

(四) 雪嶺の時世觀

風は形が無い。さりながら風車は風の方向を示す。時世は風である。個

人は風車である。一個人の見た時勢は則ち時勢に動かされた彼の感興である。感興は到底個人的である。甲の人は甲の時世觀がある。乙の人は乙の時勢觀がある。さりながら何人にも共通な、人格を離れた時世觀と云ふものは無い。時世觀と云へば即ち同時に時世觀を作つた人を豫想する。故に或人の時世觀を論ずるのは則ち同時に其人を論ずるものである。我々は斯う云ふ意味に於て此書に現はれた雪嶺の時勢觀を研究したい。雪嶺は明治の初年を朦朧に覺へて居る、大臣參議が公然吉原の遊廓に車を飛ばし、置酒高會、醉枕妖姚美人膝、覺握堂々天下權と歌つた時代に彼は其幼年を經過した。彼は佐賀の亂、西南騒動の時代に於ては既に今の中學校生徒程の年齢であつたから、新聞雜誌も讀み、多少は時世に就て自分の意

見を懐くやうになつた。彼は西郷騒動の時に東京の新聞の中には、彼を逆賊朝敵と書き、政事にも軍事にも不敵當な無能力な男だと書き、大奸は忠に似たりなども書いたものゝあつたのを知つて居る。今の公爵山縣、其時代の山縣參軍が書を西郷に贈つて自殺を勧めたことも知つて居る。西南騒動が済むと間もなく大久保が刺客に殺された。引續いて賈札の疑獄が起つた。此事件は闇から闇に葬られてしまつた。福澤諭吉が初期の東京府會に議員になつたが、福池源一郎が議長に選舉され、彼が副議長に選舉されたので間もなく福澤は府縣議員を辭した。青年時代の彼は一種の興味を以て此現象を見るを得た。板垣伯が自由民権を叫んで起つた。世間は或る程度まで板垣に動かされた。栗原亮一は一書生を以て板垣の秘書役になつ

た。薩長氏と共に廟堂の權を分ち取つて居た肥前の代表者、大隈は薩長氏に排斥され權勢から遠ざかつた。之が爲に改進黨は起つた。彼は此時代に於ては既に政治を解し、天下國家を解した學生であつた。そうして改進黨が自ら智識あり、名望あり、財産ありと誇つて居ながら却てそれが爲に世間に憎まれたことを知つて居た。改進黨と政府との戦に卷添へされて今まで政府の寵兒であつた。三菱會社は政府に惡まれた。政府は共同運輸會社を起し岩崎を壓倒しやうとした岩崎は男らしく之に抵抗し、死力を盡くして奮闘した。そうして却て政府に勝つことを得た。明治十八年に伊藤の官制改革があつた。憲法の編纂が始まつた。世間は追々新しくなつた。此頃までは薩摩人は生れながら人に長たるに適した性格を持つて居る、薩摩人

は別段に人に優れた才智がなく別段に特別に智識がなくても一部の長たるべき資格があるとされたものだが、斯うした薩摩人に對する尊敬も此頃から自ら消へた。板垣は伯爵を賜はつた。彼は頻りに御辭退申上げたけれども結局御受けをした。此書の雪嶺は板垣を斯う批評して居る。

「爵を受くるならば受くるが宜い。辭するならば辭するが宜い。辭しながら受けたりしては事がはつきりせぬ」(勝敗の分岐點)

〔板垣は〕嘗て早稻田大學の卒業式に來り、演説を勧められた時、用意が無いと言つて斷はつたが、頻りに勧められて演壇に立つた。そうして懷中より草稿を出した。用意があつたのである。』(同上)

板垣は軍人になれに勧めたことがあつた。山地少將は板垣が政治家にな

つたのを惜しんで已まなんだと云ふ、成程板垣は軍人としては適當の人らしく思はれる、板垣は政治家としては失敗して居る。板垣は思切りの悪い人である、しかしその生涯は失敗であつたにせよ、自由民權を叱呼し世を動かしたのは板垣の存在を意義あらしめるものであるとは此書の雪嶺の語る所である。さりながら是は今日までの板垣を見たからの評であらう。爵を辭した時代の板垣はそれ程世間から安く買はれて居なかつた。やがて憲法が發布になつた。森有禮が殺された。黒田内閣の外相になつた大隈は所謂大隈案の條約改正に努力して刀折れ矢盡さるまで奮闘した。天下の氣運は文學の世界にも新鮮な空氣を與へ、山田美妙、尾崎紅葉の兩才子が春の野の二の蝶の如く小説の野を飛び廻つた。日本人種に取つて新しい試であ

る議會は議論の花を咲かせた。渡邊無邊俠禪は議會に於て一錢一厘も負か
らないと云ふ押問答をした。陸奥宗光は隠然自由黨を指揮した。此時代の雪
嶺は既に文壇の飛將軍であつた。品川氏の選舉干渉があつた。その名高い
首切演説は政界をにぎはした。總理大臣の代理を勧めた井上侯當時の井上
伯は彼が議會の政治家としては必しも理想的でないことを示した。伊藤は
首相として議會の難局を救ふ爲に詔勅を奉請し、局面一變の名に依つて一
時を凌いだ。「衰龍の袖に隠れる」と云ふ詞がそれから世人の口に上るやう
になつた。相馬事件と云ふ奇獄が起つた。衛生局長の後藤新平は之に座
して入獄した。後藤が變物たる事實は此時から世間に認められた。間もな
く日清戦争が起つた。樺山は勇を黄海に揮つた。雪嶺は斯う云つて居る。

『二十七八年役には初め種々防禦策を講じた。東京灣も防禦を施したが、
後に一變して總ての軍艦を集めて黄海で敵艦を撃つことにした。そして
そこで戦を決した』(處世の上手下手)
戦争が止むと間もなく伊藤内閣に對する包圍攻撃が初まつた。雪嶺の友
人たる神鞭知常と高橋健三とは相提携して政治上に働いた。高橋は内閣書
記官長になり、神鞭知常は法制局長官になつた。此時代の雪嶺は日本有
数の政論家として既に文壇の雄將であり、しかも高橋、神鞭の同志者であ
つたから、此書の中にも二人に論及した所が多い。此書の雪嶺に依れば高
橋も、神鞭も共に人の世話をすることが好きであつた。神鞭は其爲に政友
から小父さんなどと呼ばれて居つた。是は彼が其頃既に割合に年輩であ

り、小父が甥の世話をするやうな様子があつたからだと云ふ。高橋は勿論金持ではなかつたのみならず、借金で追はれて居た。しかし他人の經濟を處理する場合には極めて嚴格であつて、財政の紊亂した或る協會の會計を整理し、其成立つやうに勤めたこともあつた。彼は官職を利用して私の益を計るものを非常に憎んだ、そうして私財のあるものを財政の當局者にすれば、却て私利を計るやうになるから、そう云ふものゝ職に居るのは不安心だと云つた。神鞭は晩年にはやけ氣味になり、酒を飲過ぎた。そう云ふ場合には友人が小父さんの介抱をした。彼は人の世話もし、人にも世話をされる人柄であつた。此内閣の内務大臣であつた薩摩の樺山伯は當時の興味ある人物として世評に上つた。此書の雪嶺は斯う云つて居る。

「樺山伯が内務大臣になつた時、或は西郷の後繼かとも思はれた。氣魄雄大で、然諾を重んずるが如く認められた。」(得要領、不得要領)さりながら彼は其實西郷の二代目でも何でもなかつた。島田三郎は彼の頼むべからざるを憤つた。

「内閣がむづかしくならうとした時に島田三郎氏は樺山伯を訪問して種々献策する處があると、伯は聽て一々領事恰も決行するが如く見えた。島田は喜んで歸つたが、後、伯は全く忘れたるが如き有様であつた。島田は失望して怒つた。」(得要領、不得要領)

樺山伯は大西郷とは似て非なるものであつた。そうして薩摩は長州から頭を押へられて長州の言ふ通に従はねばならぬやうになつた。此書の雪嶺

は薩人と長州人との差違を下の如く説いて居る。

「薩人は表面にこそせつかぬ所があり、又おつとりとして人に長たるかに見ゆるが金銭について眼がない」(大人物と小人物)

「薩人は金銭にこそせつく」(同上)

「薩摩人て松方侯の金満家なるは人の怪しまぬところであるが大山侯なり、樺山伯の金満家なるは時としては不思議がるものがある。西郷南洲は子孫の爲に美田を買はずと云つて美田を買はなんだが、今の薩摩出身者は大抵美田、若くは之に相當するものを持つて居る」(らしき善人悪人)

「長州人は(薩摩人に比すれば) 案外、金に構はぬのがある。乃木大將のやうなものがある。寺内伯も……伊藤公もさうであつた。」(全上)

薩摩人は金にこそせつく、長州人は割合に金に淡泊だ。薩摩は政界に於て長州人に壓倒された。薩人は政治家として希望少きものになつた。能力の乏しいのに人の上に坐つた薩人はだん／＼其眞價を看破されるやうになつた。政黨の勇氣は次第に増して來た。長州の政治家伊藤博文は政黨の首領大隈、板垣を内閣組織の後任者として推薦した。憲政黨の内閣が出來た。尾崎行雄は文部大臣になつた。大石正己も入閣した。政黨は獵官運動にあせつた。彼等の中には種々の運動を試みたが成功せず、僅に局長位の地位を得たものがある。餘りに獵官者が多かつたので黨の副總理楠本正隆の持つて行き場に困つた。此書の雪嶺は當時の策士が楠本を説き付けて官途の望を絶たした秘計を語つて、斯う云つて居る。

『副總理楠本を何かにはねばならぬと云ふ問題が起つたが適當の位置が無
いと云ふので楠本に頼んで黨の領袖が悉く官に就て仕舞つては野に重き
をなす者が無くなる。さすれば後に甚だ心細い。どうか閣下は野に在て
黨人を率ゐて下さるまいかと云ふことを云つた。すると楠本は如何にも
それは尤である。有力者が残つて率ゐねば事が能く行かぬ。宜しい吾輩
任じて事に當らうと云ふのであつた。』(成功失敗)

やがて憲政黨は分裂した。大隈伯は自由派が分離しても自分の派だけで
内閣を圓めやうとして飽までも踏み止まらうとした。しかし憲政黨内閣は
遂に崩壊した。星亨は事實上の自由黨首領になつた。板垣伯は政界から退
隠すべき境遇に陥つた。伊藤は自由派を基礎にして政友會を組織した。山

縣派は依然伊藤派に對抗した。伊藤に政友會總裁の名はあつたが星は猶ほ
事實上の首領と云ふべきであつた。政友會を基礎にして第四伊藤内閣、則
ち政友會内閣が出来た。星は遞信大臣になり、林有造は農商務大臣になつ
た。星と林の人物に就ては此書の雪嶺は斯う云つて居る。

『星が大臣となつた時、黨員より様々の申込をした時、星は之を採用せぬ。
黨の爲になるとか、黨の利益であるとか云ふ名義の下に虫の好いことを
持出したとき星は之を採用せぬ。さう云ふことを爲すべきでないと言つ
て制した。寧ろ人の意外に思ふ所であつた。』(得意失意)

『林は以前より金に關し兎角評判のあつた人であるが大臣となつていろ
く匠らみ、殆ど至らざるなき有様であつた。いろく好くないことを

残した。』(同上)

星はたしかに逆にとつて順に守らんとした。さり乍ら彼は悪評を蒙つた爲に議事堂で殺された。此書の雪嶺は星に對しては可なりの同情を持つて居る。星はぶつたくりを何とも思はなかつた。随分悪錢を貪り、悪錢を使つた。さりながら彼は悪人らしき善人に近かつた。彼は平素讀書に耽つた。彼には勿論書物を活用したと見るべき跡が見へなかつた、彼の演説にも、討論にも學者らしい香は無かつた。彼の思想は何時でも 明治五六年頃と大差がない、舊態依然たるものであつた。さりながら彼は兎も角も讀書家であつた。彼の神鞭知常に對する交情は友誼の模範とすべきものであつた。

『星亨と神鞭知常との交は境遇は關係はなかつた。二人はもと一の鍋で物を食つた方であるが、後政界に於て數ば敵になつた。衆議院内では殆んど氷炭相容れなんだが、私交上に於ては少しの變もなく、互に面倒を見合つた。』(朋友)

此書の雪嶺は星に對する態度は此文で分る。星は思想に於ては至て舊式だ。彼の判断は勿論不足の材料の上に築かれたものが多い。彼は要らざる所に力瘤を入れた。それが爲に餘計な敵を造り、餘計な面倒を惹き起した。さりながら彼は勇往敢爲の實行力に富んで居る。彼は考へた所は必ず之を世間に施さうとした。彼の爲たことには結果の好くないものもあつた。さりながら善惡ともに彼は其行爲を以て何等かの影響を世間に與へた。

彼は『押し通る』と云はれた程に世間を押通つた。雪嶺は此點に於て彼に興味を持つて居た。そうして多少は彼を辯護して

『(星が)無理をして金を作つたのは勢力扶植の爲である。而して勢力扶植は國政の上に大に爲す所あらうと云ふのである。自ら榮耀榮華をしやうと云ふ氣は薄かつた。』(らしき善人悪人)

とさへ云つて居る。さりながら決斷と精力の權化であつた星は空しく死んだ。やがて政友會の内閣は倒れた。桂の時期が來た。桂内閣は出來た。山本權兵衛伯は桂内閣の異分子であつて、桂に對して隱然一敵國の位置を取り數ば桂を困らせた。日露戰爭が始まつた。此書の雪嶺は此大戰に就て下の如く語つて居る。

『三十七八年役は初め種々防禦策を講じた。若し敵より佐世保の口へ水雷を敷設したならばどうなるかと云ふ事まで考へたものもあつた。が聯合艦隊を以て進んで敵艦を旅順に打つことになつた。』(處世術の上手下手) 此説に依れば此大戰の始には攻撃的に打て出でず、坐して敵を待たうとした卑怯な説も出たのであつた。さりながら幸にして此策は排斥された。

日本軍は突進した。そうして大勝を博した。滿洲軍總司令官として日本軍の中心であつた大山元帥は殆ど一切を兒玉參謀總長以下に任せ、作戰計策についても別段是ぞと云ふ案を出したことはなかつた。さりながら彼は軍人としての常識を備へて居た。(此書の雪嶺はかく言ふ)。「ハ、ア御尤も、ますます御盡力を願ふ」といつたやうなことで彼は甘く事を纏めた。

『大山元帥は眞に是れ歴史的な名將であるかは疑はしいが、普通の將校の遂に企て及ばぬ所が無いでもない。西郷と血縁あるだけ、何處となく大きな所がある。作戦計畫に於ては是れどと云ふ事がないにしても、決断せねばならぬ場合に決断する。而して迷はぬ。人をして安心せしむる所がある。位置の然らしむる所もあるが、誰れてもそう眞似の出来る所とは云へぬ。(大才小才)。

東郷大將と乃木大將は此戦争の最も重要な人格であつた。東郷は日本の海軍が爲し遂げ得べき最上の働をした。彼は水雷を以てマカロフ中將の乗艦を沈めることを得たが八島と初瀬を失つた。巡洋艦の沈んだのもある。彼は屈しなかつた。

『折角の戦艦が減じ、遠方より優勢の敵艦隊が渡來すると云ふので之に當るべき工夫を凝らして至らざるなかつた。軍艦が少なくなつて砲数が少くても命中する割合が多ければ宜いのである。最も射撃に力を致した。終に命中の度の多さを確めた。之ならば大丈夫と云ふ所で日本海海戦は始まつた。(良教訓としての失敗)。

斯うして彼は對島沖の大勝を博した。東郷は深く考へる、容易に判断せぬ、しかも一度決すれば山の如く動かぬ人である。

『旅順閉塞の議の出た時。なか／＼聽かぬ。が一度決行することになると、他の止める者があり、内地より止むべき電報頻々であつたに拘はらず、斷乎として動かぬ。而して遂に爲すべきを爲した。(熟考と迷斷)。

對島海峽の大勝は斯う云ふ人格の上に築かれた。乃木大將は難攻不落と云はれた旅順を落した。その攻撃は失敗が多かつたが兎に角陷落の目的を達した。概括して言へば此大戦は日本側に於ては總て進撃的であつた。そうして其進撃的たる點に於て成功した。

『沙河戦は戰略に於て有名なものである。敵より全軍を以て攻め來つた。

我は攻守の何れを取るべきかを評議した。して攻勢を取るに決し、直ちに進撃した。次で大に勝利を得た。』(處世術の上手下手)。

獨り沙河戦のみでは無い。此大戦の初中終が悉く攻撃的突出で成功したのである。戦争は終つた。戦後の經營は極めてむづかしい問題として日本人民の爲に残された。好い加減の遺繰りを事とするものが出て財政を取扱

つた。(此書の雪嶺は斯く言ふ)。そうして今日まで政治家に取つて財政が唯一の難關たるに至つた。廿七八年、三十七八年の戦役に依つて世界に於ける日本の位置が高まると共に實業家の勢力が増して來た。官吏から實業界に轉じるものが多くなつた。或は實業界の低い階級から這ひ登るよりは一旦官吏になつて、それから實業界に轉じた方がよいと云ふのでそうするものもあつた。官海から實業界に轉じた爲に官吏時代の俸給の幾倍を取るものもあつた。桂と西園寺は天下の英雄は君と吾と云ふ格で互に内閣を取つたり譲つたりした。桂は政友會に情意投合を申込んで政友會と提携した。政友會は原敬と松田正久の二頭政治になり、國民黨は犬養毅と大石正己との二頭政治になつた。大石と犬養とは喧嘩をした。そうして犬養が勝つた

が、大石を仲間おおいし なかまにせぬね纏まりが付き悪いから喧嘩けんかをした迹あとで仲直りなかならをした。犬養いぬがひ、大石おおいし、それに河野廣中かうのひろなかを加へ、國民黨こくみんたうは九十人の代議士だいきしを包括はうくわつする三頭政治さんとうせいぢになつた。間もなく日糖事件につとうじけんが起つた。農務局長のうむきよくちやうから日糖につとうの社長しゃちやうになつた酒匂常明さかは つねあきはそれが爲に自殺じさつした。彼は子息への遺言ゆゑごんに『父は悪友あくじゆうに過あやまられた、汝等なんぢら悪友あくじゆうに交まじはる勿なれ』と書いたと云ふ。此書このかの雪嶺せつれいは此不幸このふかなる一人物にんぶつにも多少たせうの同情どうじやうを持つて居る。

『酒匂常明さかは つねあきは日本の農政のうせいに盡す意があつた。金を作らうとする方ではなかつた。が農務局長のうむきよくちやうとして取つて居つた俸給ほうきふに幾倍いくばいする俸給ほうきふを以て迎へられたて氣が動いた。日糖につとうの社長しゃちやうになつた。』(身みを過る場合)。

彼は善い志を持ちながら金の誘惑いんわくの爲に身みを殺すに至つたのである。此この

誘惑いんわくの爲に横井時雄も身を誤つた。五十近くになつて宗教界しゆうけふかいから政治界せいぢかいに移つた彼も大なる誘惑いんわくに嚴然げんぜんとして抵抗ていこうするとは出来なかつた。栗原亮一くりはらりやうも身を誤つた。彼は板垣伯いたかきはくが自由黨時代じゆうたうじだいの秘書役ししょやくとして始て世間に名を知られ自由黨じゆうたうが政友會せいゆうかいになつた後も自分の財産ざいさんと云ふものは無く、又作らうとも思はなかつたが、それでも國の財政ざいせいに興味しゆみを持つて居て黨中に於ては其道の權威けんゐんとして財政通ざいせいつうの名が高かつた。彼は之が爲に黨の先輩せんぱい松田正久まつた まさひさが大藏大臣おほくらだいじんになつた時、大藏省おほくらしやうの官房長くわんぱうちやうになり、松田の智慧囊ちゑぶくろになつた。彼は貧乏びんぱふして居る時には立派な財政通ざいせいつうであつたが私財しさいが出来てから却て身を誤つた。(此書の雪嶺せつれいは斯く云ふ)。臼井哲夫うすい てつをも日糖事件につとうじけんの爲に身を誤つた一人である。さりながら彼は自分の罪過ざいごわを掩おほはず、平然へいぜんとし

て赤裸々の事實を法廷に語つた。此書の雪嶺は臼井を評して斯う云つて居る。

『臼井哲夫は他の恐るゝ賄賂を求め無人顔をして世間を通らうとしたのより面白いところがある。賄賂を贈つた方でも臼井だけに感服して居る。(らしい善人悪人)』

さりながら要するに彼は唯だ悪度胸の据つただけである。(是亦此書の雪嶺の語)。日糖事件の世評が薄らくと宮相田中伯を攻撃する聲が起つた。彼は無能の様に見へる人物である。さりながら常識がある。彼は土州人ではあるが準長州人といふべき經歷を持つて居る。『田中も宮内大臣にならなかつたならば廉潔であつたらう。宮内大臣となつて貪慾となつたらしい』

とは此書の雪嶺の斷案である。日韓併合條約が出来た。大逆事件が起つた。裁判所の審問は公開されなかつた。それより少し前には煩悶と云ふ詞が流行したが、それが生活難、職業難と云ふ物質的、經濟的の衣食問題に變化した。政黨が政治問題を利用して金儲けを計畫することが段々露骨になつて來た。しかし金儲けにかゝつた政黨員が實際儲けたことは多くないらしい。政黨にも金權が重くなつた、佐竹作太郎は數萬圓を政友會に出して全院委員長になつた。(此書の雪嶺は斯く言ふ)。四萬圓で世界の競争場裏に南極探險を企てたものがあつたが金持はそれを冷遇して金を出すものは少かつた。澁澤男は實業家團體の代表者として米國の各所で演説した。樞密院に引込んだ伊東巳代は再び政界に乗り出し得べき元氣が無くな

つた。政友會の策士岡崎邦輔氏は不平ながら原敬氏と離れることが出来ても無い。西園寺侯の政友會内閣は増師問題で内訌を生じた。中野武營、大橋新太郎など、云ふ實業家は非増師を唱へて運動した。西園寺内閣は倒れて桂内閣が出来た。桂公は急ごしらへの新政黨同志會を組織した。國民黨の領袖が多く其幕下に馳せ集つた。實業家では岩下清周などが桂の一部將を務めるらしく見へた。乃木大將の殉死は非常な感動を國民に與へた。此書の雪嶺は乃木大將に對しては多大の同情を持つて居る。乃木は自身は有福で、何の心配も無いけれども、頻りに國家の事、社會の事を憂ふる人であり、金錢にかけては極めて淡泊な人であつた。學習院長としての彼は細かい所に氣のつく人であつた、彼はこせついた、さりながら彼が學習

院長としてこせついたのは賞讃すべきことである、彼は誠實に國家の將來、華族の將來を思つた故にこせついた、彼は世に時めくべき身分でありながら、三十七八年戦役に於て二子を殺し、自身は粗末な家に住み、俸給の餘は出版物、其外に投じて友人に頼つたとは、此書の雪嶺が乃木に關して語つた所である。西園寺内閣から桂内閣、桂内閣から山本内閣に移つた政變の爲に所謂長閑は内兜を見透された。實業家の福澤桃介は閥族打破、憲政擁護の運動に眞先に駆け付けた一人であつた。桂侯は最も失意の境遇に於て其頽勢を挽回し得ずして死んだ。此書の著者は桂を常識に富んだことに於て殆ど天品と云ふべきものだとして批評し、

『(桂は)事をまとめるに長じて居る』(生活の愉快、不愉快)。

『(桂は)穩かに漕きつけて行く。』(豪傑風と神経質)。

『(桂は怒に就ては)練磨の上に練磨して居る。決して怒らぬ。怒ても色に表はさぬ。……怒ても色に表はさぬ。……短氣で損をするやうなことはない。』(癩癩玉と堪忍袋)。

と云つて居る。桂は自ら事を創める人ではない。特別の力を以て事を創めたことは無い。さりながら彼は『使はるゝは使ふなり』と云ふ原則を呑込んで居た。彼は井上侯に使はれ、山縣公に使はれ、松方侯にも使はれた。使はれると見せて實は彼等を使つて居た。彼は議會に對しても六づかしいことがあれば有力者に頼み込んだ。政友會總裁たる西園寺侯に頼んだ。原、松田にも頼んだ。彼は下手に出て何人にも頼んだ。しかし結果は

頼まれたものが彼に使はれたのだ。彼の行方は陰忍に過ぎた。さりながら彼は執着心に富んで居た。彼は豪傑風にも神経質にも見へなかつた。彼は自ら其光澤を消して居た。彼は之が爲に民心を倦ましめる嫌はあつたが政治家として都會の善いこともあつた。彼は人氣を集め得なかつた代りに、次第に自己の地歩を占めた。西園寺内閣と彼の内閣とは智慧の度に於ては優り劣りは無いが、彼の内閣には割合に勇氣があつた。少くとも勇氣のあるやうに見へた。そうして西園寺内閣よりも仕事をした。彼は勿論非難すべき點が多い。さりながら彼は山本伯のやうに金錢にこせつかなかつた。此書の雪嶺が桂に就て語る所は斯うである。彼が桂に對して多少の同情を持つて居たことが分る。しかし財政家としての桂に就ては此書の雪嶺は妙

な財政家が出たものであると云ひ、

『(桂は)遣り繰りの出来ぬ方でないが、遣繰りさへせばよいとするの結果、後には無い袖は振れぬと云ふ一點張りて押通さねばならぬことになつた』。(大藏大臣)。

と云つて非難して居る。財政に對する悲觀は日本人民の總體を襲つた。氣早な悲觀論者は殆ど絶望に達した。日本の財政難は年々深みに入込んで到底危機より拯ひ出すことは出来まいとまで云ふものも出来た。山本内閣に至つて藩閥は盛返して來た。薩摩が得意の境遇になつた。首相、外相、鐵道院總裁、内閣書記官長、悉く薩人で占めた。政友會を基礎とする内閣も事實に於ては薩摩内閣に近かつた。裁判所構成法の改正で多數の判檢事

が罷められた。行政整理の結果、多くの官吏が官海を去つた。日本の空中にも追々飛行機が飛ぶやうになつた。木村、徳田兩中尉は飛行機で死んだ最初の犠牲であつた。此書の雪嶺は山本内閣の末路を語らない。それは此書の原稿は山本内閣時代に書かれたのを最終のものとしたからである。山本に對しては此書の雪嶺は斯う云つて居る。

『山本伯は海軍省に在て飛ぶ鳥をも落す勢である。海軍大臣は伯の命を聞いて事を爲す。日本帝國の海軍を我物にするとはすばらしいことである』。(逆境順境)。

是は彼が首相にならない前の海軍に於ける勢力を語つたのである。此書の雪嶺の眼に映つた山本は金錢に眼がない人のやうに見へた。

「事業を爲すには金銭が必要である。先だつ物は路用の金とは眞實である。が蓄へただけでは事業にならぬ。山本伯が夙に權兵衛大臣になり、相應に功勞ありながら大人物として疑はれるのはその邊からの事でないか。」(大人物と小人物)。

此書の雪嶺には山本は小人物のやうに見へた。是まで記るした所は世書に見へた雪嶺の片言隻語を拾つて時の順序に綴つたのみである。勿論此書の雪嶺は明治年間の歴史を語る積りはなかつた、さりながら彼が時代を離れず、常に時代を解釋して居たことは彼の詞を拾ひ集めたこれだけの記事でも分る。彼は書齋に籠城する紙を喰ふ虫ではない。重ねて言ふ彼の呼吸は常に時世に通つて居る。

(一五) 雪嶺の時世觀(二)

此書は雑誌『實業之世界』に載つた雪嶺の口授の筆記である。さりながら、不思議の事には此書の全體を通じ經濟狀態を背景にして人及び人事を論じた雪嶺の意見を窺ふことが出来ない。勿論此書の雪嶺と雖も金持が金を出して政黨の要地を占めたことを語つて居る。金持の政治運動に就て語つて居る。中野武營、佐竹作太郎、野田卯太郎、根津嘉一郎、岩下清周、片岡直温、仙石貢など、云ふ多少の金持、若しくは金持に縁の有る男が段々政治界に頭を揚げて來たことを認めて居る。彼は又日本も追々大富豪の世になつて來た爲に獨立の小富豪が少くなり、小富豪でも自ら眞實の主人

になつて事業を經營するものが追々減少し、多くは、三井、岩崎、安田など、云ふ財閥に從屬しなければならぬやうになつて來たことを認めて居る。

『親譲りの金があれば、何とか之を土臺にして儲け得やうが、無理算段してやつと學校を卒業したものは如何に奮闘しても、如何に努力しても閥（實業界の閥）の外に出て位置を占めることは出來ぬ。どうしても長い物に捲かれる。何處かて資産家に從ふより外はない。』（實業家の閥）。

『金の欲しくない者は勝手であるが、金が欲しいとならば或る財閥に歸服せねばならぬ。閥の嫌ひな連中には餘り面白からぬことである。』（全上）。

さりながら此書の雪嶺は斯うした富の集中が如何なる變化を政治と社交と、道德の上に及ぼすかに於て極めて軽く考へて居る。彼は大富豪の出現を認めて居る。さりながら實業家出身の政治家を軽く見て居る。彼は實業家出身の政治家は政治家らしくなることが出來ぬ、政治的の手腕は餘り伸びない、概して言へば政治運動の爲に資産を耗らす位が結局だと思つて居るらしい。

『選舉を争ふも金持ちとして現はれるものは、金のないものより幾倍か多くの運動費を出すことになつ居る。金がなければ四五千圓で濟む所が二三萬は入る。或は四五萬も入る、……今回も十萬圓を出さうとして居るものもある。』（明治四十五年實業家の代議士）。

我々は雲嶺先生の談、何ぞ容易なるやと云ひたくなる。英雄は自己を圍んで居る時世を知つて居る。封建の時世に生死したものは、封建制度を當然のことと思ひ、自然の事と思ひ、そうして其制度を維持すべき概念を辯護した。さりながら、其時代の英雄は封建制度の無理と窮屈と壓迫とを痛感した。昔の世は土地の封建制度の時代であつて今の世は金の封建制度の時代である。代議政治が金の封建制度に包まれた一個の制度であることは、恰も參勤交代の制度が土地の封建制度に包まれた一個の制度であると同じことだ。我々の見る所に依れば、大富豪が生じ、實業家が政治界に頭を擡げて來た一事は、正に是れ日本の社會を根底から改築しつゝある空前絶後の一大革命であつて、政治も、社交も、宗教も道德も此大改革に依つて

今や改造されつゝあるのである。此書の雪嶺は現代の日本は道德的に墮落したのではない。世人行儀が昔よりも却て大に善くなつたと云ふ。日本人が道德的に墮落したやうに悲觀するものゝ多いのは畢竟道德の標準が高くなつたからだもと云ふ。さりながら此書の雪嶺と雖も酒匂常明が農務局長を罷めて日糖社長になり、そうして自殺した経路を知つて居る。多くの代議士が日糖事件で身を誤つたことを知つて居る。昔は衣食の計を口にすることを恥ぢた階級が公然生活難、職業難を語るやうになつたことを知つて居る。前途多忙の政治家と云はれた伊東巳代治男すら樞密院に引込んで富家翁を以て終らんとする獨善主義になつたことを知つて居る。概して言へば一般の人氣が自利と小成に安んずるやうになつた。

『今は何でも小心翼翼々、小さな事にも注意する方が無難である。立身するも人受けも宜い。洵に勢の避く可らざる所である。』(豪傑風と神経質) 『官吏にしても、會社員にしても、競争者たるべき、同僚を陥れたりする。時として暗闘の忌はしいのがある。』(功名心)。

現代の日本人民はたしかに道德の形式に於ては明治初年の日本人民に優つて居る。さりながら、獨善、利己、自身の成功に走りて他人の利害を顧みないと云ふ傾向が多くなつた。此傾向は此書自身にすら現はれて居る。此書を一個の思想家が其國民に與へる教訓として、讀めば、我等は異様の感を催さざるを得ない、此書は世界に於ける日本の位置を論じ日本國民として當然爲すべき任務を示したものでは無。世界の人たる高い位置から

人間の義務を論じたものでもない。そう云ふことも多少は此書に論じてある。さりながら、大體から云へば此書の趣向は一種の成功論である。たとへば此書の論旨は若しも一人の物質的利益を目的にしたので無いにした所が、要するに一人が善く世を暮らすべき渡世の術を語つたに過ぎない。個人主義、利己主義の現代には眞に相應した書物である。如何なる點から見ても現代の信仰は殆ど根本的に變化した。そうして其變化の源因に溯れば、我々は土地の封建政治が金の封建政治に移つた經濟上の變化に歸せざるを得ない。さりながら此書の雪嶺は此變化に於て多大の懸念を拂つて居ない。彼は伊藤博文と伊東巳代治を比較し、岩崎彌太郎と川田小一郎と莊田平五郎とを比較し、大倉喜八郎と門野重九郎とを比較して其才の大小を

論じて居るが、彼等の活動する時代の經濟組織が變化して行く背景には餘り注意しない。人は時代の兒である。經濟組織の變化はそれを背景とするに活動を制限する。大西郷と雖も明治十年の社會で無ければ二萬の薩摩軍人を其號令の下に死戰せしむることは出来ない。人物の大きくなるものも小さくなるものも社會と時代の然らしむることが多い。異つた時代の造つた人物を取つて其儘大小長短を比較するのは全く無意義の獨斷である。春になれば柳は翠になる、冬になれば蘆は枯れる。氣候を問題外にして翠柳と枯荻とを比較するのは無益の業だ。此點に於て我々は伊東巳代治の人物は伊藤博文より、莊田平五郎の人物は岩崎彌太郎より、門野重九郎の人物は大倉喜八郎より大きいとも小さいとも云ふことを欲しない。さりながら、此

書の雪嶺はそう云ふ比較を敢てして居る。(大才小才の題に於て)。勿論此書の雪嶺と雖も時勢の變化に無感覺なのではない。此書に載つて居る『豪傑風と神經質』の一文を見れば時代と人氣の變化に對して彼が多少の見解を持つて居たことが分る。さりながら彼は時世の人として人を見るよりも寧ろ唯だ其人自身をのみ見た。別して經濟組織の變化が生んだ現代の特徴に於ては痛切な刺撃を感じず、從て徹底した意見も持つて居なかつたらしい。しかし曩にも言つた通り是は雪嶺自身の過ではない。此書は或る無名の作者が雪嶺に題を課して聞いた所を筆記したものである。我々は唯だ問題らないのは辯を好まざる雪嶺としては當然のことである。我々は唯だ問題を提出したものが更に進んで雪嶺の堂奥に迫らなかつたことを遺憾とす

る。此書の雪嶺は現代は専門の時代であつて、種々の階級、種々の職業が専門に傾いた結果、國民の常識が缺乏して來たことを語つて居る。職業の選擇が青年の自由になつた結果、父兄が子弟の職業に對して懸念することゝ薄くなつたこと知つて居る。教育當局者が學生を世間に接近させない結果、學校の門外に出た卒業生が就業難に苦しんで居るものゝ多いことも知つて居る。此書の雪嶺は決して時勢を解せざるものではない。

『今の元老と云ふは何れかと云へば卒先して事を爲した方でない。事が起つて略ぼ地均の出來たあとに現はれたのである。困難は困難でも、順境に向ふ時であつて、其後順境が続いたのである。そう云ふ連中は動もすると幸運で出來たことを全く自分の力であるかに考へ、人を輕蔑す

る傾がある。』(苦勞人)

『しかし、役所だけで育つた人ほど甚しくない。酸いも甘いも噛み分けたと云ふ點の見えんでもない。人情の上で早わかりする所がある。』(同上)

是は彼の元老論である。

『官吏として幅が利き、辣腕と恐れられたものに官を止めてから一向價値の無いやうになるのがある。』(眞の力)。

『己の力でなしたことよりも官の力で爲した事が多く、己の力をひき出しにすると、左程のものでないものもある。』(同)

『學校に居つた時、俊才の名があつたもので、後、官に就いて書記官で終る

のがあり、局長きよくちやうで終るのがあり、次官じくわんで終るのがある。終つた時老人と云ふ程でもないに、如何にも老人じみて意氣地なくなつて居る。』(同)

『概して言へば學校を卒業するなり、官に就き、その儘、經上つたものは多く氣の毒な程坊さんである。』(同)

『大抵たいていな人は幾年か官吏をして居ると、見た所、眞面目になつて何處どことなく不眞面目になる。人と談話だんわするに所謂不得要領えうりやうの巧なるを以て自ら得たりとする様になる。思つた儘を言はない。詮じ結めると不得要領ふとくえうりやうに終る。』(眞面目)。

『少しも隠すに及ばぬ事を隠すと云ふ變妙へんめうな癖がついて居る。』(同上)

『官吏くわんりとて國民こくみんの一部である。其一部でありながら人を敵と見て油斷ゆだんせぬ

と云ふは餘りに甚しきに過ぎない。』(同上)

『ある邊では何でも彼でも秘密ひみつにし滑稽こつげいに感ぜられる程秘密にして居る。

秘密ひみつでも何んでもないものに秘ひの印しるしを捺おして居る。』(天真爛漫)。

『官吏くわんりと云へば人と應對おうたいして要領えうりやうを得るが如く、又得ざるが如くするが秘訣けつとなつて居る。』(得要領、不得要領)

『もの心がついてから役所やくしよに居り、役所で成長し、鰻上りうなぎのぼに上つて高位高かうゐ官くわんとなつたものは、役所の事務に通じて居つても役所以外の人と意思疎いしそ通つうすることはむづかしい、變に溫和おんわが無い。人形にんぎやうに應待おうたいする様である。

言ふこともなすことも作り事のやうに見ゆる。思ひ遣りの無いこと、夥おびたしい。世態人情せたいにんじやうに通じたと云ふのも待合まちあひで端唄はうたを唄うたふ位の所で察しがな

い。何でも杓子定規で押し通さうとする。』(苦勞人)。

『日本の官吏は近來益々人の眞面目でなければならぬことを言ふ。容態も何處となく眞面目である。所て官吏の言ふことは當てにならぬと云ふ調子では眞面目であるとするべきであるが、人を不眞面目にすることは官吏が與つて居りはせぬか。官吏は待合這入の道を開ひたコンミツションを取るの道を開いた。人に實を明けず、不得要領を以てするの道を開いた。』(眞面目)。

是は彼の官吏論である。

『代議士で随分圖々しいのがある。何と云はれても空吹く風の體たらくであるが選舉區での評判を心配することは却々である。外に何と言は

れても選舉區では評判の悪くないことを努めて居る。』(名譽褒貶)。

是は彼の代議士論である。

『實業家の中に不正直な者は澤山ある。頭を擡げて居る者の中に是こそ眞に正直だと看做すべきものは眞に稀である。』(正直なる失敗者)。

『平均して云ふと成功したものは事業關係の上には不正直でない。他の事には不正直であり、人を欺いたりしても取引の上にはなか／＼正直である。……其正直か業務の上に限られ、一步是より外に出れば少しも信用を置けぬ悪い人物になるのである。』(同上)

『今日の政治家として立てられて居る程の人物は實業界に幾人もあるやうである。随分腕が利いて人を操縦する方に長じて居るのがある。國家の

前途はどうかであるか、列國との關係は如何であるか、社會問題を如何にすべきかよく之を辨ずるのがある。』(實業家出身の政治家)。

『御用商人には)隨分悪いのがある。賄賂を其係りの人に納れ、官の金を引出すのであるが。其係りの者に對しては正直を守る。初め約束しただけは必ず與へる。時としては損をしても約束通りにする。それで先づ思召に叶ふやうになる。大きな御用商人になると此點が愈も行届く。軍隊に腐つた罐詰を賣るにしても係員に對し嚴格に約束を守る。其處で約束を守らぬやうなものは到底大きくなれぬ。』(正直なる失敗者)。

是は彼の實業家論である。彼が社會の地層を洞視をる智慧は此處にも閃いて居る。我々は唯だ此書の筆記者の課題が餘り小さく彼から大きな、徹

底した答を得なかつたのを恨む。

(六) 人物論

此書は人物論ではない。しかしながら此書の雪嶺は古今の人物に就て時々其詞の端に短い批評を泄らして居る。父の戦捷が續いて自分の功を建てる餘地の乏しかつたことを憂ひた 歴 山 大王が戦争に臨んで自身劍を抜いて先登したこと、感情の激した時自ら臣下を斬つたがやがて後悔して涕泣した天真爛漫の人であつたことから、現に市谷見付の内に住んで高利貸をして居る阿久津某の事に至るまで彼の談話の中には色々の人物が顔を出したり、引込めたりして居る。

釋迦しゃか

『現世の味氣ないのを説いたのは(世を)悲觀したのである。』(悲觀樂觀)。

『或は釋迦は悲觀したのでなく、轉迷間悟の順序として悲觀するやうになつたのだと云ふ』(全上)

『釋迦の出家したのは煩悶の結果と傳へられて居る。直の煩悶であつて自己に關する不平でない。』(不平及び煩悶)

『自己も、一般の人間も甚だ淺猿しい、僅に露の命を食り、ついで等しく消滅する。餘りに儂ない。如何に考へても分らず。分らぬ餘りに王城を逃れ出て、山中に修業し、遂に漸く解決を得て世界に出て一切衆生を救ふといふやうになつたのである。』(同上)

孔子こうし

『孔子は米を植ゑる事を聞かれたから、我は老農に如かずと曰ふ、菜を植ゑることを聞かれたら、我は老圃に如かずと答へられた(馬鹿、惻巧、惻巧、馬鹿)。

項羽かうう

『項羽が『虞兮虞兮如汝何』と歌ふたのは些細な事ながら豪傑として趣味を増して居る。』(豪傑風

と神様質)。

漢高祖かんのかうそ

『昔から無能にして有能を使つた例に引かれて居る。』(オダテニ乗ラヌ)。

『張良が居なければ木偶の棒である』(全上)

『叔孫通が例を作つて百官が拜賀すると吾、今にして帝王の尊きを知ると云つて得意がつて居る。』(全上)

シーザー

『シーザーの意を決してルビコン河を渡つたのは常に諺に引かれて居る。』(猪突猛進)

唐太宗たうたいそ

『創業がむずかしいか守成がむづかしいかと唐の太宗がたずねたら房言齡は創業がむづかしい

と言ひ、魏徵は守成がむづかしいと云つた。』(創業守成)

平氏へいし

『平氏は得意時代に得意であつた。得意の極りだ。平氏でなければ人ではないと云ふ有様であつた。其得意は即ち亡ぶる所以となつた。』(得意失意)

源頼朝

『頼朝はモルトケ式である。……沈思熟慮して後に屬する。』(熟考と即斷)

源義經

『義仲を攻めやうとして平等院の太鼓を打ち號令を下した時など頗る秩序がある。思慮分別のかけた方でない。』(猪突猛進)

『よく戦機に通じて居る。進むべき場合に、猪突猛進するの得策なるを信じて居る。』(全上)

『義經は軍人として天才である。』(全上)

『義經はナポレオン式である、直覺的に實行する。』(熟考と即斷)

北條氏

『北條氏は……成るだけ得意にならぬやうに力めた。高い位を求めず。如何にもして得意にならずに居らうとした。爲に陪臣の家柄で天下の權を握つて九代續いた。得意になつた時が即ち亡

ぶる時であつた。』(得意失意)

上杉謙信

『軍人として天才である。一旦機會が來れば單騎突進するを辭せぬ。』(猪突猛進)

『大軍を統率する技倆が無かつたではない。織田信長を攻めやうとした時は軍容實に堂々たるものである。不意に死んで事半途に終つたが、若し今少し生き長らへて居れば旗を京師に樹てたに相違ない。』(全上)

『謙信はナポレオン式である。直覺的に判斷する。』(熟考と速斷)

武田信玄

『信玄はモルトケ式である。能く計つて然る後に戦ふ。』(熟考と即斷)

織田信長

『今川義元が大軍を以て攻め來り、左右みな暫く其勢を避けることを勧めた時、一人聽かず。速に間道より敵陣に向て突進し大捷を得、勢を一變した。』(猪突猛進)

豊臣秀吉

『織田信長が明智光秀に殺された時に、信長の臣たる者は光秀を討たねはならぬのである。處が討たうとせず、勢を見て居る。唯だ羽柴秀吉は報道を得ると共に早くも合戦をするに決心し、直ちに發足した。勝つか負けるか明白でない。兎も角、主人を殺した者を討たねばならぬとて山崎の合戦で勝つたが、秀吉の天下を得るのは道で定まつたのである。』(勝敗の不収益)。

『秀吉は信雄と争を始めた。信雄は徳川家康と聯合した。秀吉は之を攻めて抄々しく勝を得ぬと見るや、和睦を請ふた。思切りがよかつたのである。若し戦争を續けたならば武田、上杉の争の如く久しく一地方に争つて他に手を伸ばす事が出来ぬようになったのであらう(勝敗、不利益)』

『秀吉は大事に通じたといふもの、朝鮮征伐なんか随分大雑把であつた。大事を決行する方であるが、何人か傍で細かい事に注意を與へねばならなんだ。』(大人物、小人物)』

『秀吉は實に思ふ存分、自己の能力を發揮した。即ち百姓の俸から人の草履取りになり、様々な事をして内國を統一し、更に海外にまで推し渡つた。つまり働き得る限りの働きが其人に現れて居る。同時に人間の能力は斯くまで伸ひ得るかを示して居る。』(成功、失敗)』

『朝鮮征伐は失敗であり、家の斷絶も亦正に失敗である。』(全上)』

『豊臣秀吉は己の失意になるべき時に失意にならずして人の得意になる時に乗ずるのを一の獨特の策とした。佐久間玄蕃に賤ヶ嶽の砦を奪はれたのは確かに打撃であつたが、使者が敗報を齎らして來た時、敵は退陣したかどうかと尋ねた。其儘に居ると聞いて小躍りして祝した。即ち敵の得意になつて必ず敗るべきを察したのである。急に進んで砦を取返し、次いで柴田氏を亡ぼした。先鋒が家康と戦つて負けた時も、直ちに兵を進めた。家康が得意になつて止つたならば必ず大敗したのであらう。』(得意、失意)』

『豊太閤は明の封冊に爾を封して日本國主と爲すとあつたので大に怒つて再び兵を朝鮮半島に送つた。怒るべきに怒つたのである。』(癩癩玉と堪忍袋)』

『可なり堪忍袋を締める方であつたが、時には癩癩玉を破裂させた。』(全上)』
徳川家康

『家康はこせついで見えた。蒲生氏郷は常に言ふた。『家康の如きが天下を取れるものか、天下を取るのには利家か、斯く云ふ自分である。』と。併し、氏郷は家康に先んじて死んだ。家康は大事

にも通じて居つたに違ひないが、天下を取つたのは運がよかつたとも云ふべきである。』(得意と失意)

『徳川家康は横着者と言はれて居る。横着で成功したと言はれるが、腹の黒いと否とは別として現はれた所では、嘘が少い。信雄に頼まれて秀吉に當る。即ち斷乎として戦ふ。而して斷乎として和睦すれば、飽くまで之に従つて之が力に盡した。』(正直と失敗者)。

『大阪の滅亡は咎むべき所であるが、家康自らよりも他の人の處置となつて居る。家康一代は左程不正直の跡が無かつた。』(正直の失敗者)

『家康は堪忍袋の緒を締められるだけ締めて癩癩玉の破裂を防いだ。』(癩癩玉と堪忍袋)
加藤清正

『加藤清正の臣、飯田覺兵衛は『覺』の字を太閤より貰つた。彼が言ふには自分は度々暇を貰はうとしたが、主人より今度の働は格別であつたと言つて物を與へくれる。其次に今度こそはと思ふと。又褒め言葉を頂戴する。斯くして清正公一生の代にはどうしても止めることが出来なかつた。彼は二代目になつて漸くやめたのである。』(オダテニ乗ラヌ)。

澤庵和尚

『傳説によれば柳生但馬守が武藝に於て天下無敵と誇つた。澤庵和尚は彼をして狭い板の上を歩ましめ、次でその板をある崖の上に掛け、更に歩ましめたが、柳生は足が震へて歩めなんだと云ふことである。』(不安の人)。

熊澤蕃山

『前半生人一倍に順境であり、後、半生、人一倍に逆境であつたが、逆境の時、憂きことの猶この上にもれかし

限りある身の力ためさん

と歌ふた。』(逆境順境)。

大槻傳藏

『大槻傳藏は昔の桓温が男子芳を百世に流す能はずんば臭を萬世に遺すべしといふたに思ひ附

き御家騒動を起したと傳へらる。』(功名心)。

大鹽平八郎

『本○來○癩○癩○持○て○あ○つ○た○、』(癩癩玉と堪忍袋)。

『饑饉で人が食ふ物も食へぬ場合となり、己は家財を賣つて之を救つて居るのに官吏も富豪も平氣で見て居る。或は米を高く賣付けようときへして居るのもある。終に堪へ切れなくて大阪を焼き拂はうとした。計は破れ、後己も火の中で黒焦になつて死んだ。』(全上)。

マールボロー

『大陸に功を建て、誰とて其右に出る者がないと云ふ勢であつたが、ウエリントンが、ワーテルローで大勝利を得てからマールボローの名はこれが爲に蔽はれて仕舞つた。』(人氣)。

『戰略戰術に於てマールボローの方が勝つて(ウエリントン)に居るとは現代のウォルズレー元帥も言ふ所である』(人氣)。

ルソー

『ルソーは悉く己の事を公にしたと云ひつゝ尙秘密にしたことがあると疑はれた』(天真爛漫)。

ワシントン

『常識を以て稱せられて居る。特別の才幹なく常識に富んで彼の如きを致した。』(常識)

『米國では……建國の際にはワシントンが大統領に選ばれた。是亦常に正直者の模範に推された所である。』(正直の失敗者)。

フランクリン

『米國で常識教を設定したやうに目されて居るが英國側では變物と見られて居る。』(常識)。

ミラボー

『ミラボーは決斷と努力と才幹とを以て勝つて居つた。』(正直の失敗者)。

『若し世の中に正直と云ふこと無くば、新たに最良の策として正直と云ふものを作るべきであると云つた。』(同上)。

『不可能と云ふことはない』と云ふた。』(自惚れ)。

ナポレオン

『ナポレオンが居らなくても佛國革命を鎮壓し威力を隣國に伸し得たであらう。が人の智力は何處まで發達して居るものなるかを示し得なう。』(意義ある生活)。

『ナポレオンの生活は時として無意義と認められる。歐大陸をあばれ廻つて何の結果なく終つ

たと云ふが、文明に於ける刺戟を別とし、人は奮發次第随分大きな事を爲し得るものであることを證明し、儒夫をして起たしむることは確かに生れ甲斐があつたのである。『意義ある生活』。『ナポレオン一世は子供の時に怒つたことがある。すると傍の者の云ふには、怒つたとて何になるか。王でなければ爲やうが無ないと。ナポレオンは「其ならば王になつた時改めやう」と云つた。』(不平と煩悶)。

『ナポレオンは時として彈丸雨注の間を眞先に進む。曰く「何處に在ても同じ危険である。故に場所を選ばぬのである。』(常識)。

『ナポレオンは大將を卒伍の間に見出し、見出された大將は大に働きを現はした。』(大人物小人物)。

『ナポレオンは己は天來の英傑であつて、彈丸が中らんと云ふ迷信に罹つて居るのであると云はれた。是を聞いて云ふには「何もさる迷信はない。何時彈丸が中るか知れんが前に居つても同じ彈丸が中る。何處に居つても同じことと思つて居るだけのことである」と云ふた。』(猪突猛進)。

『ワートルローの戦争、勝敗容易に決せず、ナポレオンはグルシーの來るのを待つた。ウエリン

トンはブルヘルの來るのを待つた。俄かに砲聲が大に起つた。ナポレオンはグルシーの到着したと思つた。豈に圖らんブルヘルである。而して大敗に終つた。』(獨立心と依頼心)。

『ナポレオン自ら言ふた。ワートルローに於ける戦略は我が傑作であつた。』(全上)。

『ナポレオンは學校に居つて教師から軍人として不適當と認められた。』(長所短所)。

『ナポレオンは大にも通じ、小にも通じた。策戦計畫の全體からして極めて細かい事まで眼を配つた。橋を架けることも悉く知つて居た。之に對する指圖もした。細かい事は輻重の運搬のことにも及ぶ。纏つて法典編纂事業に臨むと、之にもそれ〴〵意見を發表する實に要領を得て時の法學者をして敬服せしめた。』(得要領、不得要領)。

『ナポレオン自らも言つて居る。我爲さうと思つて出來ぬことは無い。如何なる事業でも當らうと思へば當れる。』(全上)。

『ナポレオンをして全く英國征伐を思ひ止まらしめたのは子ルソンが佛國の海軍を全滅したからである。』(人氣)。

『若し雨が降らず、砲車の運轉を自由にし得たならば、(ワートルローでも)勝を得たであら

う。ゲルシーの隊が豫期通りに到着したならば勝を得たであらう。『運不運』。

『(ナポレオン)は世に不可能の事はない。不可能の字は愚人の辭典に見出すべきである』と云ふた。『(全上)』。

『ナポレオンは時として軍旗を手にし、衆の前に駆け出して行く。皇帝の位に陞り、やゝ自ら重んずる所があつたが、それにしても平然として危きを犯した。』(猪突猛進)。

『或日、戦正に酣に勝敗の未だ決せぬ時、一兵卒が側へ来て云ふには陛下彼處に兵を進められよと云つた。ナポレオンは小癢なことを云ふなと云つたが、その時正に兵を進め、突撃しやうと思つた瞬間である。一兵卒が其機會を見付けたのに驚いた。一度は之を叱つたものゝ戦ひ終つて之を呼び出さうとしたらば戦死して了つた。帝は實に惜んで已まなんだ。』(猪突猛進)』

『事に臨んで即断する。進んで宜いか、退いて宜いか、電光石火に決する。而して其進退が宜しきに適つて居る。』(熟考と速断)。

『ナポレオンは一日、人に語つて斯う言ふた。』

我、幾萬の屍の横はつて居るのを見ても悲惨と思つた事がない。人の死ぬのを何とも思は

ぬ。が、或夜戰場を徘徊して居ると犬が一疋、死んだ主人の傍に悲しい聲を發して居つた。

之を聞いた時、實に涙が流れた。人の死ぬのを何とも思はずに犬の啼き聲で悲しむとは眞に不思議である。』(豪傑風と神經質)。

連戦連勝して皇帝の位に即くや流石の英雄も有頂天になり、世界一呑みの夢を見、遙々露西亞に攻め入り深入して大敗を取つた。』(有頂天)。

子ルソン

『ナポレオンをして全く英國征伐を思ひ止まらしめたのは子ルソンが佛國の海軍を全滅したからである。』(人氣)。

『子ルソンは常に云ふた。敵と對し、戦ふべきであるか、戦ふべきでないか、わからん時は常に戦ふべきに決したと。』(猪突猛進)』

ウエリントン

『キートンの學校で鈍物とみられ、人から軍人になると思はれず、自分も軍人になると思はなんだ。』(長所短所)。

『ウエリントンは戦争でナポレオンに勝つたが、其の勝つたのは實力よりも他の事情の與つて居たことが知れ、軍人としてナポレオンに比較するに足らずとせられた。ウォルズレー元帥の如きは以てマルボローに劣るとした。』(機會)。

ピット

『ピットは國家を救ふべきは我である。我の外に人は無いと言つて奮勵して國家を救つた。』(元氣)。

『學生の時から國家の大任を荷負ふものは己の外はない、己は總理大臣になつて國家に盡さうと云つて居た。』(自惚)。

『二十六で總理大臣になる。』(全上)。

『ピットは不可能と云ふことないと云ふ。』(自惚)。

『國歩艱難なる際に能く財政の衝に當り、君民をして安心せしめた。』(大藏大臣)。

『一年の俸給六萬圓、十萬圓の事もあつて、儲けやうとすれば様々の途があつて屢々誘惑されたのである。併し全く私財に頓着せず。這入つて來るものを水のやうに遣つて己の一家はどうな

つても構はなかつた。』(財政家の私財)。

『生涯獨身であつて自ら『國家は我が妻である』と云ふて居た。』(全)。

『死して議會で四十萬圓を募り、負債償却に差し向けた。』(全上)。

リンカーン

『最初の勞働者より漸次せり上げて大統領となり遂に暗殺せらるゝまでに人間の働きが最も能く現はれて居る。』(成功)。

『薪を割ることて人を驚かしたことがあつた。』(全上)。

『南北戦争の困難なるに際し、誰を司令官に任ずべきかと云ふ時彼は第一にグラランドを選んだ。グラランドはそれまで餘り名も無い人であつた。さうして最初の戦に出て見事に敗れた。茲に於てか非難の聲が大に高まつた。議會でも世間一般でも、『人を代へねばならぬ』と云ふ事を喧ましく言つた。さうして之を大統領リンカーンに迫つて來た。リンカーンは黙して考へ然る後、言つた。矢張りグラランドである。最後に勝を制するは彼である、而して結果は果してさうであつた。』(全上)。

『眞面目なる人物としての標本はリンコーンの如きが擧げらる。眞面目くならず、鹿爪らしくせず。而して眞面目である。何處までも眞面目である。』(眞面目)。

『彼は労働者であつた頃から常に正直者を以て目せられた。』(正直の失敗者)。

『貧困の時、隙さへあれば讀書した。』(讀書法)。

チスレリー

『人に嫌はる、猶太人であつて、

『猶太人を嫌ふのは嫌ふ者の分らぬのであり。猶太人は眞に腦力の勝れた者で我も亦其一人である。』

とて大に奮發し、英國の首相として歐洲全土を相手にした。』(功名心)

『ヂスレリーの出づる頃、保守黨は振はなんだ。足並も揃はなんだ。處を、彼は之を率ゐ大なる勢力を形造つた。彼は毀譽褒貶半して居たが、十分に黨首の資格に供へた。』(代議士と模範的代議士)。

ミル

『ミルが煩悶したのは事實であるが、これは病的になる程、勉強をした結果である。』(昔芬人)

西郷隆盛

『鹿兒島に歸つて甚だ貧乏した。俸給は取らず、賞典祿は私學校に擲つた。裸になつても平氣である。』(悲觀樂觀)。

『國威の外に延びぬを心配して已まなんだ。如何に露國に當るべきかは其苦心する所であつた。』(全上)。

『眞面目臭らずに眞面目であつた。』(眞面目)。

『西郷南洲は清濁併せ呑み、而して清を吐うとした方である。』(大人物、小人物)。

『西郷南洲が子孫の爲に美田を買はずと言つたのは口ばかりでなく事實であつた。』(大人物、小人物)。

『南洲の行動に就て毀譽褒貶の區々であるが何人も其大人物たるを容すのは身を以て同胞國民に献じた所に在る。』(全上)。

『老西郷が維新の際に於ける決斷と云ひ、廢藩置縣の際に於ける決斷と云ひ……(社界の爲め、國家のため、人類の爲めと云ふ處から決斷した。)(大才小才)』

『西郷は尋常の事に於ては要領を得ぬ方であつた、が大事を決するに臨んで、當時何人も之に及ばなかつた』。(得要領、不得要領)』

『西郷は人情に厚かつた。人情の爲めに身を犠牲に供したとも言はれる。』(豪傑風と性質)』

『彼は正直者である、恐らくは大なる正直者であらう』。(正直なる失敗者)』

『維新の三傑と云ふが……難儀をし、危ない目に逢つたのは西郷が第一である。それだけに思ひ遣りがあつた。多くの人が付き従つたのも、一は同情に酬ゆるに同情を以てしたからである』。(苦勞人)』

『平生大鹽の書を読んだ。』(癩瘡玉、堪忍袋)』

『煽てに乗る方』。(オダテニ乗ラズ)』

大久保利通

『不正直でない』。(正直なる失敗者)』

『大久保は……辛酸を経た點に於て西郷に及ばん。比較的順境に過ぎ、役人風の所があつた。』(樂勞人)』

『役所で成長した役人と同じではない。親切なる所の蓋ふべからざるものがある』。(全上)』

『大久保は煽てに乗らぬ方。』(オダテニ乗ラヌ)』

『大久保自ら財政の智識及び手腕があつたと云ふではない。併し一度是認したる所を決行するの力を具へて居た』(藏相)』

後藤象次郎

『後藤伯は清濁併せ呑み、而して濁流を構はず吐いた。』(大人物小人物)』

『後藤伯は大人物たるの器であつたが、晩年何事を心がけて居るか分らなくなつた。』(全上)』

『後藤伯は高島炭礦で外國人から金を借り、抵當の形に取上げられんとした時、元老院に入り、外國人は抵當の形に土地を押ふべからずと制定した。』(癩瘡玉、堪忍袋)』

山岡鐵太郎

『何事があつても平氣であるが、事一たび君國に關すれば心配して已まなんだ。』(悲觀樂觀)』

岩崎彌太郎

『明治時代に於て航海業に最も多く手を伸ばした。』(意氣ある生活)。

『最も速に最も大なる富を造つた。』(全上)。

『政府の助を得て居る。國家の力が加つて居ることが多い。』(全上)。

『彌太郎は事業に當て放膽である。困難に出遭つても乗越し得るを信じて居る。』(悲觀樂觀)。

『政府に取入り、御用聽きになるにしても、故岩崎彌太郎氏は己の事業の爲に之を活用したるものにて元老の意に従ふよりも、結果に於て元老を従はしめて居る。(獨立心と依頼心)。

『岩崎彌太郎として時代に傑出したのは決斷である、敢て爲すの力にある。…共同運輸會社と戦つた。』(大才小才)。

『無一文から起つた。』(成功失敗)。

『土佐藩の力を借り、政府の力を借りた。』(成功失敗)。

『或る重役が會社用の紙を私用の手紙に使つた時、大に怒り、罰金三百圓を科した。』(正直なる失敗者)。

凡そ此類である、近代若しくは現代の人に就ては

伊藤博文

『飲食に奢らなんだ。食物は何でも宜い方である。葡萄酒とて好いのを選ばなんだ。平生飲んで居るのは價の安いのであつた。』(生活の愉快と不愉快)。

『女に溺るゝ程愛するに至つたのではない。』(全上)。

『山縣公に比すれば伊藤公、井上侯は天真爛漫の部類に屬する。』(天真爛漫)。

『卑しい所から様々な働きをして、人の容易に昇り得ざる所まで昇つたのに力が見へて居る。』(成功失敗)。

『西本願寺の重なる僧侶が會合して改革を計つたことがある。島地なども居つた時に伊藤が席に列んだが、その言ふには

『君等が改革を計つたとて何んにもならぬ。何でも法主の擧丸つてからの事である。それではなくては駄目である。吾輩はさうして居る。』(勝敗の分岐點)

『公の詩は概ね何處か偉らがつて居る。』(自惚)。
 『煽てに乗る方』。(オダテニ乗ラヌ)。
 『讀書家、……ナインチーンス、センチユリーとか、コンテンポテリーとか重もなる雑誌の論文に目を通して、日本内の議論を見逃さず讀んだ。』(讀書法)。
 『伊藤は不意に内閣を投げ出した。』(良教訓としての失敗)。
 『(使はるゝは使ふなりと云ふ)此邊に於ける呑込みが足らなんだ。それで議會に對しても兎角衝突を免れぬ。』(使ふ人と使はるゝ人)。
山縣有朋
 『眞面目と言ふ評判であるが眞面目でないと見られた。伊藤公と何れが眞面目であるかは疑問である。』(眞面目)。
 『山縣公に比ぶれば伊藤公及び井上侯は天真爛漫の部類に屬する。』(全上)。
 『山縣公は何時も餘り人氣がない、併し無いだけに勢力が長續きして居る。』(全)。
 『粘り氣がある。執着力がある。』(熟考と即斷)。

『官政改革なり、憲法制定なり、……さうして他の元老が惑ふ折に進んで爲すべきことを爲した。』(勝敗の分岐點)。
 『政黨が勢力を得て政權を争ふに及ぶと、大隈、板垣に内閣を組織せしむるやうに奏上した。』(勝敗の分岐點)。
 『大政黨に勢力のあり首領なく困難すると見れば己、總裁となつて政友會を組織した。』(全上)。
 『腰が弱いとの嫌はあるが思切りが宜い。巧く行かなんだ事もあるが、巧く行つた方が多い。』(全上)。
 『伊藤はよく考ふる方であつた。決斷せぬではないが、何人か後楯になつて決心を強める方がよかつた。』(熟考と即斷)。
 『後進の人に比べて豪傑流の所がある。』(豪傑風と神經質)。
 『伊藤公は得意になりさうであるが、なか／＼満足せぬ。それよりそれと上を望んだ。』(得意、失意)。
 『金にかまはぬ。』(らしき善人悪人)。

『後進の人に比べては豪傑流の所がある。』(豪傑風と神経質)。

『煮ても、焼いても食へぬ人物と言はれて居るのも、得意失意が分らぬからである。』(得意失意)。

『煽てに乗らぬ方』。(オグテニ乗ラヌ)。

『煽てに乗らぬのでは無い。之を煽てる範圍が狭いのである。小數の腹黒い連中が時として公を煽てる。而して公は煽てられて動き出すこともあるが、伊藤公ほど煽てられる跡が明かでない。』(全上)。

西郷從道

『大膽である。何物をも恐れなんだ、如何なる事變が起つてもビクともせぬ。』(豪傑風と神経質)。

『よく人と柔らぐ、是が爲に起るべき喧嘩が起らずに済んだ事は幾回もある。』(全上)。

『人を助けて總理大臣にした。己自らはならぬ。』(全上)。

『人を知るの明あり、又自ら知るの明があつた。』(全上)。

井上馨

『山縣公に比すれば伊藤公、井上侯は天真爛漫の部類に屬する。』(天真爛漫)。

『無理な事して骨董品を蓄へるだけ私慾が勝つて居り、人ににがしく感ぜられる所がある。』(全上)。

『井上侯は直覺的に判断もする。又深く考へて、然る後判断する事もある。唯だ粘り氣が足らぬ。折角計畫して實行に著手したことも、厭いて來ると棄て、仕舞ふ。』(熟考と即断)。

『尋常ならぬ才能。』(全上)。

『井上侯なんか、世話焼きとしての苦勞人である。頼み込めばよく世話をやく。臺所のすみまで世話をする。人をして負債より免れしむるばかりでなく、取立て、よい位置に置き一方ならぬ金持にまでする。仕方は親切であるなれど、取り入らない者は捨て、顧みないことがある。齋藤修一郎氏の如き、うつちやられた方である。世話をやく、やき方が我儘である。焼かれんことを好まんものも少くない。』(苦勞人)。

『井上侯は今少しの事で悪人らしき善人となるべきであるが是までの所、そこまでは至らぬ。衰

むべき人物でない。善人らしき悪人よりも善いやうである。『らしき善人悪人』。

『癩癩玉を破裂させるを以て評判になつて居る。』(癩癩玉と堪忍袋)。

『人情負けする方である。』(全上)。

『井上は後藤の失敗の後を承けて自ら炭礦を占めやうとした。』(全上)
大隈重信

『大隈伯とて單に豪傑流でない。行く所として可ならざるなしと見られて居る。よく時代に當嵌まる。』(豪傑風と神経質)。

『大隈伯に養子一件のあつたのは惜むべき限である。』(全上)。

『嘗て英語を人に教へた事もあるが、自在に讀めぬ。重に譯書を読む。譯書を読むことはなかく素晴らしい。而して讀んだ所を活用する。』(讀書法)。

『人の話を聞て之を活用する。』(全上)。

『受賣りであると言はるゝが善く活用する。』(全上)。

『記憶力に富み、さうして消化力に富んで居る。』(讀書法)。

『全體の纏まりを缺くにしても、政治なり、財政なり、外交なり、商工業なり、何でも一通り人に負けぬだけの説を吐くのは決して尋常でない。』(全上)。

『大隈伯は時として己の一生を失敗の歴史と云ふ。』(失敗の良教訓)。
兒玉源太郎

『兒玉大將はナポレオン式である。事毎に即斷する。判斷流るゝが如し』(明治四三年)(熟考と即斷)。

『齷齪たらず物に拘はらぬ。愉快である。豪膽である。大なる計畫を敢てする。而してまた細かいことに氣を付ける。人を外らさず。餘り隠し立てもせず。執着力は足らなかつたかも知れぬ。』(豪傑風と神経質)。

中井櫻洲

『三條公の馬が病氣であると云つて預り、而して之を千圓に賣つた。公より屢々督促して來るも其儘にして置く。或日貴顯の會合して居る席で云ふには『先日三條公の馬を預つて之を賣つた。すると公は督促甚だ厳しい。太政大臣たるものが、馬一匹の事を斯くも八かましくするか』と。

公は是より到頭督促をせぬことになつた。『(馬鹿、伶俐、巧、と、伶俐、巧、馬鹿)』

『奇智妙策、湧くが如きものであつて、遂に一生何を成し遂げたか云ふことはない。』(全上)。

寺内正毅

『寺内伯は朝鮮總督として如何はしい事が多いが一向金に執着せず、金を取らうと思へば随分取れる境遇であるのに、まださう云ふ跡方の見えぬのは、やゝ案外とすべきである。』(らしき善人、悪人)。

原敬

『随分實業界には縁故があり、儲けやうと思へば儲かることがあるのにその割に儲けぬ。自ら實業家を以て居らうとせぬ。銀行頭取でも何でも政治上必要を感じればさつさと罷めてしまふ。』

『兩段にかけても、一方主とすべき場合には、實業を去ることを何とも思はぬ。』(實業家の代議士) 後藤新平

『豪傑風な所があつて而も神経質であるが、今の所どれだけ働き伸るか疑はしい。或は神経質に過ぎはせぬかと恐れられる。』(豪傑風と神経質)。

『煽ての利く方となつて居る。錦織剛清に肩を入れたなど煽てらるれ證據である。』(おだてに乗らぬ)。

加藤高明

『加藤高明は物の分らん方ではない。伶俐である。敏腕とも云へやう。』(苦勞人)』

『選舉競争の際横濱で、折角、連の者があやなして挨拶した後、人の感情を害する様なことを云ふ。自分は出たくないが、選舉せらるればと云ふ口振である。悪い氣でないのだが、人を嫌がらせる。彼奴を選ぶものかと云ふ氣を起させる。遂に失敗して了つた。』(元氣)。

『早く岩崎家の婿と云ふので、到る所ちやほやされ、知らず知らず殿様ぶるやうになつたのである。苦勞が足りないせいである。』(苦勞人)。

頭山滿

『一浪人たるに過ぎぬが何處となく世に重きを爲す。』(大人物、小人物)。

『巨萬の富を集め、巨萬の富を散じた。』(大人物、小人物)。

『頭山滿氏の如き別段何事を爲すと云ふのではない。太平の世に無用の長物であるが、今日尙ほ

人氣があるのは、大事の場合に、人の出来ぬ事をすると思われられて居る所ないとせぬ。『元氣』
 『亂世に大なる人物として現はれたであらう。今の治世には何とも仕様がなない。』(豪傑風と神經質)。

『頭山満氏は内實才物であると云ふ噂もあるが、現はれた所は全く豪傑風である。今の世には働き悪くなつて居る。』(全上)。

安田善次郎

『安田氏は高等高利貸と言はれたり、吝嗇と言はれたりする。』(元氣) 『安田は高利貸といはれる。』(正直なる失敗者)。

『兎に角、自ら富を作り自ら之を運用した。』(元氣)。

『何處までも金貸で通す。』(獨立心と依頼心)。

『金を積上げて其儘に終らうとする。』(全上)。

『安田は人情を構はぬ所もあるが、容易に承知せぬ、代りに一度承知すれば之を果す。整理を引受けければ、斷乎として之に任ずる。唯だ其條件が酷なのである。酷であつても相手は承知した

上である。約束しただけのことは確かに果す結果になる。厭がられながら信用のあるのも其處にある。』(正直なる失敗者)。

『或人若くは或會社を困難より救つたこといくらあるか知れん、倒れかゝつたのも是が爲に繼續して來て居る。大きな會社の破綻を救ふこと氏の如きは多く例がなからう。十萬は愚か百萬をも擲つが、悉く己の利害より打算する。己の利益を認むれば十分に世話するが、利益にならんことは全く關係せん。慈善事業の如きも、すべて己の利益を考へての事である。人の爲にするのは悉く己の爲である。』(苦勞人)。

大倉喜八郎

『事業家として尋常ならぬ才幹を持つて居る。』(意義ある生活)。

『財産に於ても岩崎、三井を外にし二三を争ふ位になつて居る。』(全上)。

『岩崎と同じく、或は岩崎以上に政府の力を借りて居る。』(全上)。

『何か面白からぬ手段を廻らした事があつたにもせよ。自ら力を振つた所が多い。それだけ彼の年で猶ほよく働き得るのである。』(元氣)。

『爲さうと思ふ所は斷乎として着手する。』(大才、小才)。

『一中を唄つたり。狂歌を作つたりする。』(修養)。

澁澤榮一

『場合に依り手厳しく政府の財政策を非難したりする。政府からは徒らに非難するものと見られたことが一再でない。』(悲觀樂觀)。

『よいと思へば賛成し賛成すれば助力する。』(大才、小考意)。

『私のない人と云はれる。』(大才、小才)。

『如何なる相談を持ちかけても、何等かの決斷を與へ、なるべく助けやうとする。』(大才、小才)。

『餘り手を廣げて世話すべきをも世話せず、無責任であると非難さるゝにしても、世話する氣はある。世話し得るだけ世話する。場合に依りて肌を脱ぐと云ふことがある。』(人氣)。

『澁澤男は財産に於て第一流でない。而して時に實業界を代表するかに認められるのは、己の儲けに専らでなく、儲けのみに力を注がず、世間の爲に盡力し、世間に益した所もあるが爲で

ある。』(犠牲)。

『多くの會社に關係して儲けに抜目ないと言はれたが、之を儲け一方の人物に比すれば己の儲けに淡泊であるといはねばならぬ。』(全上)。

『長者番附に於て餘り高い位置を占めるものでないが、一層高い位置を占めるものよりも受けが宜い。』(公平、不公平)。

『澁澤男にして泡沫會社の創立委員長となり、田舎者に田地を賣らしむるが如き事がなかつたならば實業家として殆ど模範的である。』(正直なる失敗者)。

『大體に於て事を爲すに正直と言はねばならぬ。』(全上)。

『澁澤男もよく世話をやく方であつて、是が爲に濟はれたものも少くない事業の成り立つたものも少くない。世話焼きとして感心すべきであるが。然し手の餘り廣きが爲め世話が届かずして、人を失望せしむることもある。』(苦勞人)。

『澁澤男は強ち人に煽てられるとは言へぬ。否、容易に人に馬鹿にされる人ではない。が、多くの會社より重役になるやうに頼み込んだは、男の名を利用するのであつて、煽てゝ其名を貰ひ受

けた跡方が無いでもない。……この煽てに乗ると見ゆるは、實業上に比較的多く功を樹て得た所である。』(おだてに乗らぬ)。

『實業團體の代表者としては米國の各所で演説した。御苦勞千萬だと冷笑して居るものもある。』(全上)。

『誰にでも頭の低いやうである。時として低過ぎると思はれる。低くて相手が困ることもあるが、大臣に會つたとて岩崎、三井に會つたとて、村長に會つたとて別に變りはない。』(頭の下げ方)。

『己は金の爲に金を作らず、國家の爲に金を作つたと云ふやうな口吻がある。』(當今の實業家)。

『男の事業の國家の爲になつて居るのは確かである。』(全上)。

『何人も及ばぬ程に公の爲、私の爲、斡旋の勞を取つた。』(全上)。

『從來の經驗が良藏相たるべきを證明して居る。しかし何分にも老人であり、自分にも好まず。強て勤めたとて最早盤根錯節を切り捲るはむづかしい。』(大藏大臣)。

是は多い例の唯だ半分ばかりを擧げたのである、論語の中には多く孔子の近世人、若しくは現代人の評論がある。論語の興味も其處に在る、此書が多く讀者の興味を引くのも恐らくは此點であらう。

(付奥中の世)

賣
捌
所

東京市神田區駿河臺
振替東京一二三三六



電話本局
四八五五

製複許不

錢五拾貳金價定

大正四年二月十五日印刷
大正四年二月十八日發行

著者

山路愛山

發行者

名著評論社

右代表者

東京市神田區小川町四十一番地
櫻村象介

印刷者

東京市京橋區西紺屋町二十七番地
佐久間衡治

名著梗概及評論
附奧論

株式會社秀英舍印刷

名著梗概及評論

袖珍上製頗美本
紙數各冊二百頁
定價各冊二十五錢
郵稅各冊四錢

論評及梗概著名

- 三宅雪嶺氏の
- 高山樗牛氏の
- 島崎藤村氏の
- 國木田氏の
- 筧博士の
- トルストイの
- 和泉式部の
- 綱島梁川氏の
- 徳富蘆花氏の

世の中
樗牛全集から
藤村詩集
獨歩集
古神道大義集
戦争と平和集
和泉式部歌集
病問録
みづのたはごと

山路愛山氏著
三井甲之氏著
川路柳虹氏著
福永渙氏著
岩野泡鳴氏著
相馬御風氏著
與謝野晶子氏著
生方敏郎氏著
生田長江氏著

論評及梗概著名

- ダンヌンツイオの
- バーネット夫人の
- 大西博士の
- 尾崎紅葉氏の
- 井原西鶴翁の
- 茅原華山氏の
- ゲイテの
- 頼山陽の
- 徳富猪一郎氏の
- 新渡戸博士の
- ツルゲーテフの
- 樋口一葉女史の

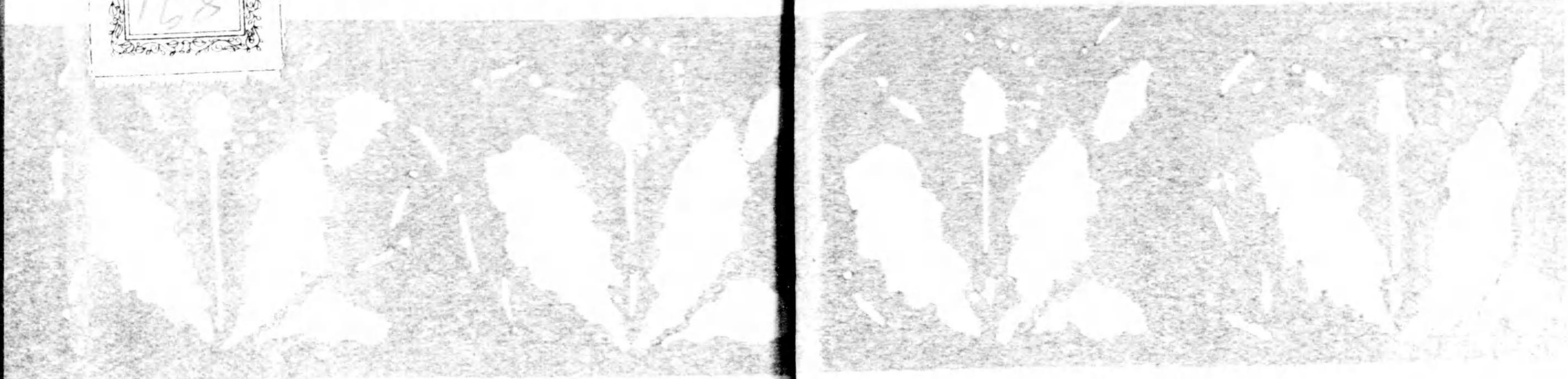
死の勝利
小公の子
西洋哲學史
多情多恨集
西鶴傑作論
人間生活論
フアウスト
外史論纂
時務一家言
修養
浮草
一葉全集

西宮藤朝氏著
平山訓子氏著
三木露風氏著
中村星湖氏著
眞山青果氏著
安成真雄氏著
齋木仙醉氏著
大町桂月氏著
山路愛山氏著
西川光次郎氏著
本間久雄氏著
馬場孤蝶氏著

論 評 及 概 梗 著 名

■ 尾崎紅葉氏の	■ 十返舎一九の	■ 正岡子規氏の	■ 幸田博士の	■ 福澤翁の	■ 夏目漱石氏の	■ 櫻井大尉の	■ 孔子の	■ モンテスリーの	■ 夏目漱石氏の	■ 柳川春葉氏の	
金 色 夜 叉	膝 栗 毛	子 規 隨 筆	努 力 論	小 倉 百 人 一 首	福 翁 百 話	鶉 籠 話	肉 彈	論 語	教 育 學	吾 輩 は 猫 だ ー ぬ 仲	
徳田秋江氏著	土岐哀果氏著	坂元雪鳥氏著	稻毛詛風氏著	青柳有美氏著	田中王堂氏著	川路柳虹氏著	福永渙氏著	生田長江氏著	伊藤長七氏著	生方敏郎氏著	永代美知代子氏著

278
168



終

KEI
BIN
KWAN